闇の中の一筋の光　from FINAL FANTASY

.黒鬼風斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
闇の中の一筋の光　ｆｒｏｍ　ＦＩＮＡＬ　ＦＡＮＴＡＳＹ

【Ｎコード】
Ｎ８７６１Ｍ

【作者名】
・黒鬼風斗

【あらすじ】
世界を救うため、クリスタルの加護を得た四人の戦士達は最終決戦に挑む。しかし、「予想外の敵」を前に彼らは敗れてしまう。何もない空間、“無”へと取り込まれた彼ら。しかし……戦士の一人、バッツ＝クラウザーは何者かに誘われて目を覚ます。
時同じくして、彼らと同様に世界を救うために戦った戦士達がいた。彼らは最終決戦に勝利し、そして平和を勝ち得た。しかし、戦いの傷跡は大きく、世界の復興に勤しんでいた。
そんな時、突如として「魔物」が現れる。それを異変と感じるまで

そう時間は掛からなかった。

全く異なる二つの「星」が交差する時、戦士達は再び、戦いに身を投じる――。

※ファイナルファンタジー5と7のコラボレーション作品です。
気合の入ったアクションシーンに注目して読んで頂ければ幸いです。

※現在休載中です。必ず完結させますので、気長にお待ち下さい＞＜；

プロローグ

目の前に突如出現した、全てを闇へと葬り去る、ブラックホール。

初めは子供の手の平の大きさだった小さな黒色の玉は見る見るうちに成長し、１０秒もしない内に人を呑み込める程の大きさになった。成長は止まる事はなく、今も尚成長し続けている。

俺は、動く事が出来なかった。地面に突っ伏したまま、俺の身体がまるで俺の物ではなくなってしまったかのように、「立ち上がれ」という信号を受け付けてはくれなかった。俺の身体は俺の意思とは裏腹に、永久の眠りに就こうとしていた。

俺は、拳を力一杯握り締めようとした。

歯を、思いっきり食い縛ろうとした。

負ける筈がないと思っていた。封印される程の強力な武器があって、親父達やクリスタルの加護があって、心強い仲間達がいて、そして人知を遥かに上回る“力”があった。負けられない、という気持ちもあった。この命に換えてでも勝たなければならないと、決意もあった。

俺は、負けた。

“奴”の作り出した、幻影に負けた。

雷を纏った聖剣エクスカリバーは真っ直ぐに“奴”の身体を貫く筈だった。俺の持てる力の全てを注ぎ込んだ一撃で、“奴”を倒せる筈だった。

だけど、剣を振り下ろした先にいたのは“奴”ではなく、俺が最も敬愛した男――親父だった。

親父の腸に深々と突き刺さった、俺の剣。剣の柄から伝わってきた肉を抉る感覚は、とっくの昔に慣れた筈なのに、胃の中の物が込み上がって来そうな程、気持ちの悪いものだった。

親父の口が、何かを告げようと口を開いた。だけど声にはならず、喉の奥から込み上がって来た鮮血が声の代わりに口から飛び出し、俺の頬に付いた。

パニック、だった。

剣を振り下ろす寸前まで“奴”の姿だった。なのに、どうして――。

親父は既に何年も前に死んだ。

分かっている筈なのに、その突然の出来事は俺の思考力を皆無にさせた。

次の瞬間、俺は地面に突っ伏していた。全身から力が抜けていき、同時に身体から溢れ出る鮮血が地面を朱色に染める。それでも何とか顔を起こし、“奴”の姿を確認しようとした。

そして分かった。親父の姿をしていたのは“奴”ではなく、異形のモノだったと。

気付いた時にはもう、仲間達もやられていた。恐らく、俺と同じように幻影を見たんだろう。

相手は“奴”一人だと思い込んでいた…それが唯一の俺達の敗因。

そう信じたい。力不足だったなんて、思いたくない。

だが何を思い、信じたところで結果は変わりはしない。

――鉄巨人ぐらいの大きさになったブラックホールに、砕けた地面が吸い込まれて消えていく。そして俺の身体も、徐々にブラックホールの方へ引き寄せられていく。

俺の前に仲間達の姿がなかったのが、唯一の救いなのかもしれない。

……呑み込まれていく仲間を、見ずに済む。

俺の名を呼ぶ声が聞こえる。

……もう、逃げられやしない。お前も分かってるだろ？

俺はただ――。

“奴”の嘲笑う声を聞きながら――。

己の非力さを恨みながら――。

せめて仲間の無事を祈りながら――。

広がる闇の中へ、落ちていった。

×××

陽の光が優しく差し込むこの湖は、今日も変わらない。

あれから何日経っただろうか。私は毎日ここに訪れてはただ静かな水面を眺めている。花束の一つでも浮かべるべきかと最初は思ったが、湖の底に沈む“彼女”が唯一見る事が出来る景色に小さな影を作ってしまうのはどうか思い、そのままにしている。

この場所は、このままでいい。これからもずっと、この静かで居心地の良い場所であればいい。

さて、と一度少し大きく呼吸し、一本の木に凭れ掛かる。ゆっくりと目を閉じて考えるのは同じ事。

私はこれから、どうすれば良いのだろう。

戦いに終止符を打つまでは考えた事がなかったこの疑問。ここで何日も考えているのだが、答えなど見つかりはしない。誰かに聞くという手もない事はないが、こういう事は自分で考えるべきだ――と、”彼女？なら言うだろう。

まだ尽きようとはしない私の命。もしかしたら尽きる事はないかも知れない私の命。

死にたいとは思わないが、特に生きたいとも思わない。今となっては“生き続ける事”が与えられた罰なのだろう。悪夢に魘されているよりもずっと、重たく感じる。

無駄に生き続けるよりは、何かをやるべきだろう。だが、何をすればいいのか分からない。殺す事と壊す事――闇の仕事しか能が無い私に、やれる事などあるのだろうか。

いっその事、戦いがずっと続けば良かった。

戦いが終わって痛感している。私には戦いの中でしか生きられない、と。己の人生を振り返ってみても、悪夢に魘されていた数十年以外は、“闇の仕事”の記憶が圧倒的に多い。そして、私の中に潜む悪魔達の破壊する事の衝動が、私自身までも駆り立てようとする。戦う事しか能の無いモノをずっと抑えていられる自信などないが、抑えなければならない。

今はもう、倒すべきモノなど、いないのだから。

――ドクン。

心臓の音がやけに大きく聞こえる。“奴ら”の事を考えているせいだろうか。

――ドクン。

鼓動が徐々に早くなる。

――ドクン、ドクン、ドクン……。

いや、違う……？

何だこの感覚は。

全身の毛穴が開くような、心地悪い感覚。

――ドクン、ドクン、ドクン……。

何かの気配を感じて、目を開く。

湖の中央に、何かが立っていた。

――ドクン、ドクン、ドクン……。

――ドクン。

戦いはまだ、終幕を迎えていないのかも知れない。

闇の中の一筋の光

プロローグ　完

第一話　「幕開け」

落ち着く。

何だろう、この気持ちは。

敗北を認めたからだろうか、死が近付いてきているからだろうか。

それとも、一人ぼっちだからだろうか。

……落ち着く。

ここは、居心地が良い。

目を閉じていたら永久の眠りに就けそうだが、俺の目は閉じようとはしなかった。

目を開いていても閉じていても、見えるのはただ無限に広がる闇だけなのに。

光が見えるかも知れない、とでも思っているのだろうか。

生きようとする人間の本能がそうさせるのだろうか。

……どうでもいい。

俺はただ、この無気力な空間に、永久に浮かんでいたい。

……そういえば、皆もここにいるのだろうか。

いるのなら、ただ、謝らないと。

――すまない、俺のせいだ。

いつもの調子で声を出す。

だけど、それがちゃんとした音になっているのか、それが誰かに届いているのか。

俺には、分からなかった。

聞こえるモノはない。

見えるモノもない。

触れるモノもな――。

……。

……？

……温かい、手？

誰か、いるのか？

俺を、何処へ連れて行こうって言うんだ。

なぁ、おい――。

……。

……まぁいいや。

どうせ何にもする気なんてないんだ。

好きにしてくれよ。

でも、出来るのなら――。

俺はここで、このまま、いつまでも、眠っていたかった。

闇の中の一筋の光

第一話　「幕開け」

それが幻覚かどうかは分からないが、ただ言えるのは、それが本

物ではないという事。

湖の丁度中央に立つそれは、真っ直ぐに私を見つめている。口元に優しげな笑みを浮かべながら。

それはゆっくりとこちらに向かって歩き出した。水面に波紋が生じる事はなく、何の音もしない。だがそれは確かに、水面を歩いていた。……奇妙な景色だ。それでも私はまだ、何の行動も起こせてはいなかった。また、まだ起こすつもりもなかった。

やがてそれが大地を踏む。やはり何の音もしない。宙に浮いているのだろうか。

「ヴィンセント……」

それが口を開き、私の名を呼ぶ。姿だけでなく声も同じ、か。

「こっちへいらっしゃい、ヴィンセント……。昔のように私に甘えに来なさい……」

私とある程度離れた場所で手招きするそれは、“彼女”そっくりだ。だがそれが“彼女”である筈がない。

腰のホルスターに手を伸ばし、銃を引き抜く。そのまま真っ直ぐに銃口をそれに向けるが、それは私の行動に繭一つ動かさなかった。トリガーに指を掛けても、それは私を誘惑するような姿勢を崩さなかった。上目使いの少し赤みを帯びた瞳に、私の姿が映っている。

「あなたに私が撃てるかしら？」

「……」

本物ではないと分かっているのだ、撃てない筈はない。

だが――。

指は凍り付いたように動かなくなり、銃を持つ手が微かに震え、その額に向けていた照準が合わなくなる。本物ではないと分かっているのに。

頭で分かっていても身体が言う事を聞かない。身体が拒絶しているのだ、偽者であれ何であれ、“彼女”の姿をしたモノを。

「うふふ……」

不敵な笑い。“彼女”はこんな笑い方をしない。

「さぁ、こっちへいらっしゃい」

「……断る」

「あら？　久しぶりに声を聞かせてくれたわね？　嬉しいわ」

何度も何度も指先に力を入れようとするが、トリガーを引ける気がしない。一発撃てば終わる筈なのに、その一発が撃てない。こんな事は初めてだ。昔は友人でも仕事であれば躊躇しなかったのだが――……。

舌打ちし、銃を降ろす。……情けない話だ。

「お前は何者だ」

「忘れたの？　私の名前は、ルクレッツィアよ」

質問してみるも私の予想通りの返答だった。そんな事が聞きたい訳ではない。

「もう一度聞く。お前は、何者だ」

「……」

「答えろ」

それの動きが、止まった。糸に吊られたマリオネットのように身体全体が脱力し、ただこの星の重力に身を任せているような状態になった。先程まで動いていた手がぶらぶらと宙を泳いでいる。地に崩れ落ちないところを見ると、本当に上から糸で操られていただけかもしれない。そう思い、上を見る。逆光が眩しくて何も見えなかったが、その光を遮る影がなかった事から上には何もいない事が分かる。

視線を元に戻した時、それの姿はなかった。跡形もなく、消えていた。

少し困惑したが、私が冷静のままでいられたのはそれと同時に私の背後に出現した、何者かの気配のおかげだ。その者から発せられる隠せない負のエネルギーは、風と共に私のすぐ傍を吹き抜ける。

たん、と地面を蹴って真上に高く跳躍する。すぐさま下に向き直り、素早く銃を抜き、トリガーを絞った。標的の額に風穴が一つ開く。紫色の噴水を見届けると宙返りして再び地面に降り立った。同時に、改めて悪意の根源の姿を確認する。

……女だ。青色のドレスを身に纏った、何処か高貴な雰囲気を持ち合わせている女。

だが、分かる。その女は当然ヒトではなく、魔の者だ。
「貴様ぁ……よくもおぉぉっ！！」
ヒステリックに叫ぶ女の額。先程開けた筈の小さな穴は既に塞がっていた。
「私の術に掛からないとは……貴様、何者だ！」
「その言葉をそのまま返そう。貴様、何者だ」
術――あの人形の事か――そう思いながら女に銃口を向け、問う。
「……いいだろう、教えてやる。我が名はセイレーン。魂を喰らう者だ」
「ほう、ならば先に忠告しておく。私の魂など喰らったら腹を壊すぞ。……最も、喰わせるつもりはないがな」
「面白い事を言うな、貴様。見たところただの人間のようだが……フン、まあいい。久しぶりの食事だ」
「喰わせるつもりはないと言った筈だ」
「ぬかせえぇっ！」
セイレーンと名乗った女の手から突如小さな火の玉が生まれる。火の玉――恐らく火の魔法『ファイア』だろうか――が徐々に大きくなり、丁度ヒュージマテリア程の大きさになると同時に、私に向かって放たれた。空気を焦がしながら私に近付くそれは、残念ながら私を動じさせる事すら出来なかった。
魔法を対処するには魔法が最適だ。だが、「争いの元になる。マテリアを回収しよう」と先の戦いが終わってすぐに、仲間内のマテリアは全て回収してしまった。確か回収したのはクラウドとユフィ

の二人。……こいつを片付けたらいくつか取り返しに行かなければ。

……取り返す？

何故私は、「これからマテリアが必要になる」などという勝手な憶測を立てているのだろう。

何にせよ、つまり私は今、魔法を対処する有効な手段を持ち合わせていないという事。

「燃え尽きてしまえぇぇっ！！」

セイレーンの高笑いが聞こえる。無論、燃え尽きるつもり等ない。どちらにしろ『ファイア』程度の魔法では燃え尽きる事も出来ない。

先程と同じ要領でセイレーンを撃ち抜こうと私が跳躍した、その時だ。

「掛かったな！！　轟け、雷よ！！」

自分の真下にセイレーンが立つところまで跳躍したところで素早く宙返りし、銃口が標的を捉えた瞬間だった。突如上空から落ちてきた小さな雷が私の身体を貫く。

空中で雷系の魔法を食らうと少々まずいものがあるのだが、何にせよ所詮『サンダー』程度の魔法だ。油断していたとは言えこんなものを食らってしまうとは少々行動が単調過ぎたか――と反省しながら、私はやはりその弱い雷系魔法を諸共せず、不意を突かれてズ

レてしまった照準を再度合わせ、そしてトリガーを絞った。

「な、にぃ……っ！！？」

額に1発、左胸に2発、両足に1発ずつ弾丸を浴びせる。本来ならもっと雨のように弾丸を降らせるが……もうトリガーを引いても弾丸は飛び出さない。つまり、弾切れだ。どうやら先の大戦で使ったきり、リロードしていなかったようだ。……全く、らしくない。

地面に着地した私の目に映ったのは、セイレーンの驚愕した顔。血がドレスを紫色に変色させている。奴は不老不死なのだろうか、やはり風穴は全て塞がっていた。

「貴様は一体何なんだ！！　人間の癖に、魔法を諸共しないとは――」

「……効かない訳ではない。一つ教えてやろう…お前は“雑魚”だ」

リロード――銃に弾丸を詰め込みながら、口を開く。

「だが、これだけ弾丸を浴びせられても立っていられる事は褒めてやろう」

「この私が、雑魚だとっ！？　この私が！？」

「ああ、雑魚だ。……私達からすれば、な」

「そんな馬鹿な！　“あの4人”には十分通じたのに――」

「誰の事を指しているかは知らんが……殺される前に話せ。お前が何者であるか」

魂を食らう者、だと言っていたがそんな事はどうでもいい。私が知りたいのは、奴が何処から来たか、どういう存在なのか、だ。この星の魔物の殆どは科学者によって作り出された物。魔晄に長時間

浸された獣、もしくは――人間。だが、魔物化した人間ももはやヒトの形をしてはいない。セイレーンのようにヒトの形をし、ヒトの言葉を話し、そして魔法が使える……そんな魔物、私は今まで見た事も聞いた事もなかった。

「また殺されてたまるものかぁぁ！！」

私の言葉など届いていなかったのだろう、セイレーンは絶叫と共に姿を変えていく。身体が徐々に干乾びていき、やがて骨格が丸見えになる程となる。見る見るうちに眼球が退化し、やがて出来たその二つの空洞が髑髏を連想させる。――いや、これはもはや髑髏だ。……アンデッド化したのだ。

鼻孔を衝く腐臭。……酷い臭いだ。

「なかなか死なないと思っていたが……成程、アンデッドだったか」

「殺ス、殺ス殺ス殺ス殺ス殺スススッ！！！」

リロードを終えた銃を再びセイレーンへと向け、トリガーを絞る。飛び出た弾丸はセイレーンの身体を貫通し、皮膚や骨を弾き飛ばした。だが、恐らく――。

「死ネエェェッ！！」

セイレーンが見た目からは想像出来ない程の速さで近付いてくる。何発もの弾丸が奴の身体を貫通したのだが、奴は一向に怯まない。当然か。アンデッドに物理攻撃など殆ど効きはしない。私のハンドガンのような小銃では余計、な。そうなると当然魔法しか効かない訳だが、先程も触れたようにマテリアは一切持ち合わせていない。となると唯一の対抗手段は――。

銃をホルスターに押し込み、そしてマントの内側に突っ込んだ右手が、“何か”に触れた。

……フン、奴程度のアンデッドには少々お高いかも知れない、な。

一本のボトルをマントの中から取り出した直後、私の脳天目掛けてセイレーンの鋭い爪が振り下ろされた。なかなか素早い攻撃だが、所詮アンデッド、攻撃が単調だ。サイドステップで難なくそれをかわした私に、今度は横向きに爪を振るが、私に触れる事すら適わない。それでも爪を縦と横、交互に繰り出して標的を追い詰め、やがては――……だろうが、私に通用する戦法ではない。

無論、アンデッドがそこまで考えて攻撃しているのかも、疑問だがな。

バックステップを繰り返して攻撃をかわしていた私だったが、やがて背中が大木にぶつかり、動きが止まってしまう。チッと舌打ちし、視線を大木から前へ戻した時、当然の如くセイレーンは好機とばかりに腕を大きく振り上げた。

ここぞという時には隙が大きく生じる。大きく腕が振り上げられた瞬間、私は地面を蹴ってセイレーンの懐へ潜り込み、作っていた拳をぶつけ、そして続け様に身体を捻るようにして奴を蹴り飛ばした。派手な音と共に倒れ、砂埃が少々宙を舞い、風に流され消えていく。向こうのダメージは皆無だろうが、それでいい。

「終わり、だ」

呟き、取り出していたボトルを起き上がろうとしたセイレーンに向かって放り投げる。それと同時に同じ右手で銃をホルスターから引き抜き、それを素早く照準に入れ、トリガーを絞った。

飛び出た一発の弾丸はボトルを砕き、そしてセイレーンの身体を貫通した。刹那の時間差があり、砕けたボトルの破片と中の液体――エクスポーションが奴の身体に浴びせられる。

「ギャァァァッ！！」

アンデッド、という性質の魔物はどんな原理かは知らないが、治療薬や治癒魔法に弱い。エクスポーション程の治癒力がある治療薬ならば、大抵の雑魚のアンデッドは消滅する。勿論このセイレーンも例外ではなかったという訳だ。

セイレーンの身体が、まるで硫酸か何かを浴びたかのように、白い煙と悪臭を撒き散らしながら、溶けていく。

「マタ……コノワタ、シガ……死ヌ……？」

「……次からは獲物を選ぶ事だ。最も、次はないがな」

銃をホルスターの中へ押し込み、溶けていくセイレーンを見る。元々殆ど骨に近い状態だった為か、奴の身体のあちこちがぼろぼろとその自重に耐え切れずに地面に落ち、消えていく。

「セッカク……蘇ッタ……ノニ……ヤット……」

「……」

「……人間ナンカニ……二度モ……負ケル、ナ……ンテ……」

それが最後の言葉だった。そう言った直後、セイレーンの顔が陥没し、やがて全て跡形もなく消滅した。少し強い風が吹き、その場に残っていた悪臭を彼方へと運んでいった。

私は一つ深呼吸し、数秒間静寂に浸った後、また突然何があっても対応出来るようにとリロードを始める。

――蘇った？

――あの４人？

リロードしながら、奴の放った言葉を思い出す。何を言っているのか、私には分からないが、ただ、奴の言葉からある程度の推測は可能だった。

セイレーンは一度、死んだ魔物。恐らく４人の人間と戦って、敗れたのだ。その４人もセイレーンと対等に戦える程度の人間だという事は、そこまで突出した強さの持ち主ではないという事だろう。私がかつてクラウド達と合流する以前に彼らが倒した魔物……という可能性も皆無ではないが、彼らならこの程度の相手に苦戦する筈がない。

まぁ、どうでもいい。私の第六感と私の中の悪魔達が、また何かが始まるのだと訴えている以上、私も動かなければならない。

まずはマテリアか。特に必要という訳でもないが、あるに越した事はない。クラウドとユフィは……まだミッドガルの辺りにいるのだろうか？　もしそうなら、ここ――“忘らるる都”からかなり離

れているな。

私は、ゆっくりと歩き出した。そして5歩程歩いたところで、一旦立ち止まり、声に出して呟く。それが“彼女”に届くなど思っていない、だから殆ど独り言に過ぎない。それでも私は、一つ、言っておきたい事があった。

「――騒がしくしてすまない。暫くは私も来ないから、ゆっくりと休んでくれ」

何処か懐かしい風が草花を揺らしたような、そんな気がした。

To be next…

第二話　「異邦人」

花の香りがする。

……何で花の香りだって分かったんだろう。

花の香りなんて、ほとんど記憶なんかないのに。

甘いような、酸っぱいような、そんな匂い。

こういう匂いは好きじゃないけど……嫌いでもない。

ただ、今はこの匂いが俺を癒してくれるようだ。

だんだん気が楽になってくる。

だんだん生きようという気持ちになってくる。

だんだん立ち上がりたくなってくる。

……だけどやっぱり、もう少しこうしていたい。

この場所で、目を閉じていたい。

――もう、迎えが来るよ。

……誰だ、あんた？

頭に直接声が響く。……酷く違和感があり、気持ちが悪い。

――起きて。

聞き覚えの無い女の声。

それでいて、何故か懐かしい声。

……おふくろ？　いや、違う。

――あなたはまだ、生きる事が出来る。

……？

――だから、起きて。

起きる？

――身体を動かしてみて。

動かす？

――自分の身体の動かし方、思い出して。

思い出すも何も――こうだろ？

「あ、動いた！」

「何だ、脅かしやがって」

――そう、いい子ね。

子供じゃねぇよ、俺は。

……なぁ、あんた誰だ？

――……。

何で俺を生かした？

――死すべき存在じゃないから、かな。

……他の皆は？

――ごめんなさい。私にはあなたしか見つけられなかったの。

そう、か。

生きてるかどうかも分からないのか？

――……ごめんなさい。

……。

「ねぇ、起きて！」

「水ぶっかけりゃ起きるか？」

「そんな事したら風邪ひいちゃうよ！」

「大丈夫だろ、そんなヤワな男じゃなさそうだ」

何だか騒がしいな。

――迎え、よ。

俺の頭から声が消え去ろうとする気配を感じる。

まだ聞きたい事は山ほどあるってのに。

――星……いいえ、全ての生命を救う為に、あなたは今ここにいるの。

……何だって？

――とにかく生きて。自分の運命を、受け入れて。

ちょっと待てよ！　何の話だ、そりゃ！

まずここは何処なんだ？

俺にどうしろって言うんだ？

教えてくれよ！

教えてくれよ、なぁっ！！

「そらよっ！」

ばしゃ――……ん。

……。

……。

……。

「――冷ってえぇぇっ！！？」

闇の中の一筋の光
第二話　「異邦人」

「おう、目が覚めたか」

鮮やかな色の花弁のベッドの上で死んだように眠っていた若い茶髪の男も、バケツ一杯の冷たい水を頭から被せられると絶叫と共に上半身を持ち上げた。状況が把握出来ていないらしく、きょろきょろと辺りを見回していたが、やがて俺と目が合ったところで声を掛ける。

「ほら、風邪引くから拭きな」

「ぶはっ！？」

首から掛けていた俺の汗拭きタオルを男の顔に投げ捨てる。男は顔から急いでタオルを遠ざけると露骨に嫌そうな表情を浮かべた。そういや使い始めてからもう何日も経つが、一回も洗った事ねぇな……少し臭ったか？

男がタオルと俺の顔を交互に見る。俺が睨みを効かせてやると、男は更に困ったような表情を浮かべ、ははは と力なく笑った。

「お兄ちゃん、これ使って」

何処から持ってきたのか、いつの間にかピンク色のワンピースを着た俺の天使――マリンが真新しい真っ白のタオルを茶髪の男に差し出していた。

「あ、ありがとう……」

「どういたしまして。……父ちゃん！」

「な、何だよ」

男に丁寧にお辞儀をし、真っ白のタオルを渡した代わりに俺のタオルを受け取ったマリンが俺へと向き直る。少し、怒ってるのか？ぷくっと頬を膨らませる…怒った顔のマリンも可愛いなぁ――などと俺は口に出して言えるキャラじゃねぇって事くらい、重々承知している。

少し、思う。俺がマリンから暫く離れている間に、マリンは随分と成長した。大人っぽくなったというか――まぁ見た目は変わんねぇんだけどな――“あいつ”の嫁さんに、少しずつ似てきている。俺としては複雑な気分だ。……少しだけ。ほんの少しだけ、な。

「これ、すっごく臭いんだから！　こんなタオル、人に使わせちゃダメだよ！」

「そ、そんなに臭いか？」

「と～～～っても！」

「……分かった、出来るだけ洗濯するようにする」

「宜しい！」

マリンから受け取ったタオルを鼻に近付け、くんくんと嗅いでみる。

そんなに臭いか？　俺には分からねぇ――。

「……言葉、通じる」

ぼそりと茶髪の男が呟いたのを、俺は聞き逃さなかった。

「あん？　何だって？」

「あ、いや、別に」

慌てたように下を向く男。……何だこいつは？

格好を見てみるが、俺からすりゃ変な格好の一言だ。動きやすさを重視しているのか、薄い生地の白いシャツとズボン……左肩に金属の防具みたいなのを着けていて、額や耳にアクセサリーを着けている。ガントレットも着けていて剣士みたいな印象を受けるが、肝心の剣は見当たらない。

昔の貴族のような格好――……正直、時代を感じる。一体どこの国の王子様だってんだ？

……色々と聞きたい事があるが、とりあえず――。

「お花、ぐちゃぐちゃ！」

「あ、ごっ、ごめん！」

男の身体の下に敷かれているいくつもの花を指差すマリン、それ

に気付いて慌てて立ち上がり冷たい地面の上へと移動する男。俺がもっと早く言うべきだったか、敷かれていた花々は茎から綺麗に折れ曲がってしまっている。……いや、男を見つけた時点で花畑の外へ投げ飛ばしてやりゃ良かったんだ。俺の馬鹿野郎、すまねぇマリン。

そんな花を見て、男はバツが悪そうに頭を掻く。

「その、ホントごめん」
「大丈夫だよ。お花、丈夫だから」
「……それ、君の花？」
「ううん、お姉ちゃんのお花だよ」
「へぇー、そのお姉ちゃんは――」

しゃがみ込み、折れてしまった花の花弁を優しく撫でていたマリンの指が、止まる。

「……ライフストリームに、還っちゃった」

一瞬、意味が分からないという表情を浮かべた男だったが、時間が経つと共にそれがどういう意味なのか薄っすらと理解したようで、再び頭を描いた。

「ごめん」
「――でも、お兄ちゃんからお姉ちゃんの匂いがするのは、どうして？」
「え？」
「……何でもない！」
「あ、ちょっと！」

マリンは言うなり立ち上がると、駆け出して教会から出て行ってしまった。追いかけるべきなんだろうが、確か仕事が一段落したら？あいつ？もここへ来るって言ってたから任せよう。マリンがいない方が話が早いかも知れねぇし、ここら一帯に魔物が出る事はないだろうしな。とにかく今は、この謎の男から目を離しちゃいけねぇ――そんな気がした。

「二人っきりになったな」
「……そう、だな」
「さて、色々と質問があるんだが――」
「俺も、色々と聞きたい事がある」

茶髪の男はゆっくりと俺の目を見た。綺麗な、澄んだ目をしている。悪人ではないようだが――どうだろうな。

「何でここで寝てたんだ？　しかも花をベッド代わりにして。酒に溺れでもしたか？」
「分からない」
「……見掛けない顔だが、何処から来たんだ？」
「……分からない」
「記憶がないのか？」
「いや……そういう訳じゃない」
「じゃあどういう訳なんだよ！」

思わず声が大きくなってしまう。こんなところをマリンに見られたらまた短気だとか怒られちまいそうだ。だが、怒らせるような発言をするこいつも悪い。つまり、答えたくないって事か？

溜息を一つ吐き、チッと舌打ちする。

「……先にお前の質問に答えてやるよ」
「すまないな。ここは……何処なんだ？」

やっぱり、こいつ記憶がねぇんじゃねぇか？

そう言おうとしたが、言葉が声になるより早くそれを呑み込む。先に質問に答えるって言った以上、答えてやらなきゃならねぇ。

「ミッドガルエリアの中心地、ミッドガルのスラム街の外れにある、小さな教会だ」
「……」
「どーした、それで終いか？」
「いや――……」

そう言ったきり、男は黙り込んでしまった。ぶつぶつと何か呟いているようだが、小さすぎて俺には聞こえなかった。自分なりに状況を整理してるんだろうか。

何か面倒になりそうだ。やっぱりマリンのお守りは？あいつ？に任せて、俺は仕事をしてりゃ良かった。

×××

どうやら俺は、異世界に来てしまったらしい。

俺に水をぶっ掛けて起こした見るからに乱暴そうな大柄の男は、ここをミッドガルだとかスラムだとか言っていたが、俺の頭ん中をいくら穿り回してもそんな地名出てきやしない。教会とも言っていたな……何かお偉いさんにお祈りする場所だって死んだ婆さんに聞いたくらいで、実際に見るのはこれが初めてだ。教壇があって、長い椅子が沢山ある。この長い椅子を埋め尽くす程の人間が教壇に向かって手を合わせる光景を思い浮かべてみるが、俺からすれば妙な光景としか言い様がない。

ふと、男の右腕に目が止まった。機械の――腕？

「なぁ、それ――」

「あん？　義手がそんなに珍しいか？」

「……初めて見る。その……何で穴がいっぱい開いてるんだ？」

義手、というからには手の代わりの筈なのに、機械のそれは手の形など微塵もしていなかった。丸い筒のような形で、その先には手の指くらいの穴が規則正しく並んで円を作っている。

「何だぁ、銃も知らねぇのか？」

男がそのジュウというのをこちらに向ける。真正面から見て初めて分かったが、穴で形成された円は二重の円だった。つまり、円を二つ形成するように、穴が開いていた。

「……ホントに知らねぇのか。フツー銃を向けられたら誰だってビビるぜ」

俺が特に何の反応も示さなかった事がつまらなかったのだろうか、男は舌打ちしてからそのジュウという物を降ろした。

「フツーは……ビビるのか？」

「そりゃあな、こいつから飛び出た弾丸は簡単に命を奪っちまうからな」

「なっ！　それ人殺しの道具かよ！」

「……そういう言われ方は好きじゃねぇが……そう言うならお前もそうじゃねぇのか？　見たところ、剣士のようだが」

ぴくん、と俺は眉を動かした。

「ま、魔物が存在する限り武器の一つや二つ持ってなきゃ外にも出られねぇ。俺のもお前のも――いや、武器の目的は同じだ。だから自分を棚に上げてそんな事言うな。……分かったか？」

「……すまない。そうか、この世界にも魔物が――」

「あ？」

こういう場合、自分が異世界から来た事を臭わせるような発言は控えた方がいいんだろうか、とも思ってみたが、誰にも言うなとはあの女の声は言わなかったから別にいいんだろう。まずい事になればその時はその時、まぁ正直に話したところで信じてくれないだろうから、とりあえずは話さない事にするか。

「いや、何でもない」

「隠し事が多いな、お前は。……そんじゃ、俺はそろそろ行くぜ」

「へ？」

「『へ？』じゃねーよ。俺はずっとお前に構ってる程暇じゃあねぇんだ。危ねぇ奴かと思っていたけどよ、どうやらそうでもなさそう

だしな」

そう言って男が踵を返し、背を向ける。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！」

とにかく、何をどうするにもこの世界の事を知っておく必要がある……と、思う。言葉は通じるようだからこの男をこのまま行かせて、俺は気の向くまま風の吹くままに歩き回ってもいいんだが、多分、そんなにのんびりする訳にもいかない……筈。

俺のいた世界がどうなったか、仲間達はどうなったか。どうしても気になるのはその二つだが、知る術なんてないし、その当てもない。もう一度眠ればまたあの声が――……なんて都合の良い展開があるとは思えない。そうなると、やっぱり俺がまずしなければいけない事は、知る事だ。

この世界の事を。成すべき事を成す為に。

「あん？　まだ何かあるのか？」

「あ、あのさ」

「んだよ、さっさと言え」

この世界の事を教えてくれ、なんて言って親切に教えてくれる人間なんていないだろう。大抵の場合、「何で教えなきゃいけないんだ」とその理由を求められる。その理由をいちいち答えるのも面倒だし、何より「俺は異世界の住人だから」では理由にはならないだろう。やはり笑い飛ばされるのがオチだ。

不意に脳裏を過ぎる、白髪の老人。

……そうか！　こうすれば一番手っ取り早い！　ありがとよ爺さん！

「実は俺……記憶喪失なんだ」

男が呆れたような、面倒くさそうな……妙な表情を浮かべながら俺に向き直る。

「は？　お前、さっきは――」

「い、いや！　色々と考えてみたら、やっぱり俺は記憶がないようなんだ！」

「……何でこんなところで寝ていやがったんだ？」

「思い出せない」

「何処から来たんだ？」

「それも思い出せない」

「……名前は？」

「バッツ＝クラウザー」

「……」

「……あ！　いや、な、名前だけは覚えてるんだ！！」

危ない危ない、つい名乗ってしまった。男が疑いの目で俺を見ていたが……やがて大きな溜息を吐き、言った。

「しゃーねぇな、ついて来い」

「い、いいのか？」

「飯くらいなら食わせてやる。後は……面倒見の良い奴がいるから、そいつを紹介してやる」

再び歩き出した男の横に少し早足で歩いて追いつき、男の歩幅に

合わせて並んで歩く。こうして見るとやっぱでかいな、腕の太さとか俺の二倍はある。一体どうやって鍛えたらこんな身体になるんだろう。

あぁそういえば、まず先に聞いておかなければならない事があったな。

「なぁオッサン」
「……何だ？」
「名前、教えてくれよ」

男はまた面倒くさそうな顔をして、溜息を吐いた。……名前を言うのが照れ臭いんだろうか？

「俺は――」

男がそう口を開いた直後だった。外からのとある声が、この教会中に響き渡った。……一瞬、時が止まったかのように、静かになった。

「マリン！！」

その静寂を怒声が切り裂き、男が走り出す。それにつられるように、俺も男の後を追った。

とある声、それは――。

あの小さな女の子――マリンという名の子の、悲鳴だった。

To be next…

第三話　「VSアルテロイテ」

気のせい、かな？

お姉ちゃんの声が聞こえた気がして教会の外へ出てみたけれど、外はやっぱり瓦礫の山ばっかりで、お姉ちゃんの姿なんてなかった。教会の中はお花がいっぱい咲いてるのとお日様がぽかぽかしてるおかげで忘れちゃってたな、外はこんなに空気が汚れてるって事。

鉄と錆の臭い。上からたくさん機械が落ちてきたせいで、前よりもっと酷い臭い。父ちゃんからはずっとこんな臭いがしてるから、私はこの鉄や錆の臭いは、嫌いじゃない。でもやっぱり私は、お花の香りの方が、好き。

いつもはティファと教会へ行くの。でも今日は……父ちゃんと行きたかった。父ちゃんと二人で、いたかった。

全部が終わって、久しぶりに父ちゃんと会っても前のようにはいかない。父ちゃんも他の皆も、壊れた街を直すんだって今日もずっと一所懸命働いてる。久しぶりに会えたのに、あんまり構ってもらえない。……きっと私は寂しかったんだと、思う。だから……少し我侭言ったんだけど――何だか教会に変なお兄ちゃんがいるし、父ちゃんはちょっと怖い顔になっちゃったし……ハァ、どうしよう。せっかく久しぶりに二人っきりだったのに…。

あのお兄ちゃんが悪いんだ！　……なんて言っても仕方がない事は、分かってる。お兄ちゃん、とても優しい目をしてたし。きっと何かワケがあって教会で眠ってたんだ。でも――。

――――……。

え？

……お姉ちゃん？

聞こえないよ、何て言ってるの？

ねぇ、お姉ちゃん！

「――お嬢ちゃん、こんなところで一人、何してるんだい？」

後ろから突然声を掛けられて、私の身体は思わずビクリ、と強張った。

「もしかしてお母さんと逸れちゃったのかな？」

振り返った私が見たのは、腰が綺麗に折れ曲がった、優しそうな顔をしたお爺さんだった。長い、白いお髭が風に吹かれて心地良さそうに揺れてる。

だけど私の身体は強張ったままで、何か言おうと口を開いたのに、声は出なかった。

……怖い。どうしてだろう、お爺さんが、怖い。こんなに優しそうな顔をしてるのに、優しそうな声をしてるのに。

「……どうしたんだい？　身体が震えてるよ？」
「……っ」
お爺さんの手がポン、と私の頭の上へ乗った。……冷たいっ！？
その手を払いどけようとしたけれど、私の身体はまるで金縛りにあったかのように、動かなかった。
「君は、勘が良いんだね」
お爺さんの目つきが、変わった。優しそうな目から、怒りに満ちた目に。
「……私が、そんなに怖いかい？」
「……っ！」
動かなくなった身体を無理矢理動かし、首を横へ振る。何度も、何度も――。
「――怖がるのも無理はない。私は、貴様ら人間が恐怖する存在なのだからな」
目の前が真っ白になり、風に吹かれて草木が揺れる音も、鳥や虫達の声も、聞こえなくなる。
――身体が消えていくような奇妙な感覚の中で、私はやっと、喉の奥から声が出せた……ような気がした。

闇の中の一筋の光
第三話　「ＶＳアルテロイテ」

そいつはただの爺さんって訳じゃあなさそうだ。

何かに怯えた表情のマリンがいる――という俺の予想は外れ、教会を飛び出した俺の目に映ったのは、一人の老人の背中。こちらに背を向けている為その顔を見る事は出来ないが、そいつに近付こうとした俺の脚を止めた、そいつから発せられている禍々しい気配が、爺さんが何者であるか教えてくれた。

人間じゃ、ねぇ。

最初に、そう思った。いや、感じ取ったって言う方が正しいかも知れねぇ。

そして悟った。一帯にマリンの姿が見えねぇのは、そいつのせいだって事をな。

躊躇せず右腕――銃口をその爺さんに向け、叫ぶ。

「おいてめぇっ！！　そこで何をしてる！！」

ゆっくりと、爺さんが俺の方へと向き直ろうとした――その時だ。

「オッサン、どいてろっ！！」
「なっ……！？」

俺のすぐ傍を駆け抜けていった茶髪の男――バッツとか言ったか――が、走りながら右手を高々と掲げる。その瞬間、そいつの右手に瞬時に剣が現れる。それは……異常に長く、そして細い剣だった。あの“ツンツン頭”が持っていた剣とは種類がまるで違うが、俺はその剣に見覚えがあった。

そう、あのくそったれの銀髪野郎が持っていた剣にそっくりだった。

どこから剣を出したのか、その剣をどうしてお前が持っているんだという疑問はさておき、俺はバッツに何かを言うために口を開く。

おい待てよ、まだそいつが化物と分かった訳じゃあ――。

だが、剣先が標的に触れる寸前、爺さんの姿が忽然と消え、勢い余ったバッツの剣は地面に深々と突き刺さる。バッツが舌打ちするのが聞こえた。

「やれやれ、この星の人間は随分と乱暴だな」

上から聞こえてきた低い声は、先程の爺さんの物だ。教会の屋根に立つその姿を確認し再び銃口を向けた時、いつの間に跳躍したのかバッツが爺さんと同じ屋根の上にたん、と降り立った。剣を構え直すのはいいが……それ以上近付くなよ、お前が邪魔で照準が合わなくなっちまう。

「邪魔だ」と一言、俺が口を開くより先にバッツが口を開いた。

「――星？　ならここは異世界じゃなくて別の星なのか？　……アルテロイテさんよ」
「……きっ、何故貴様がここにいる！？　貴様は“無”に呑まれた筈では――」
「お前こそ何故ここにいる？　いや……そもそも俺を知ってるって事は、俺達が倒したアルテロイテの一人って事だよな。……質問を変える、何故生きている？」

な、なんだぁ？

どうやら二人とも知り合いみたいだが……話してる内容がさっぱりだ！

異世界？

別の星？

……“ム”？

難しい話はいつも聞き流してる俺には二人が話している話の内容が理解出来ず、またそう簡単には出来そうにもねぇ。まぁ後であの茶髪野郎に簡潔に聞くとして、今はそんな事よりマリンだ！

「先に私の質問に答えろ。貴様、何故ここにいる？」
「そんなの知るか、起きたらここにいたんだ。ほら答えてやったぞ？　俺の質問に答えろ」
「フン、答える義務はない」
「そうかい、なら力ずくで――」
「お前ら、俺様を無視してんじゃねぇよ！！」

四つの目がぎろり、と俺を見る。バッツはともかく、爺さんの眼光は鋭く、冷たい。ぞくりと背筋が悪寒で震えてしまうが、それを悟られぬように、再び口を開く。

「あの子を――マリンを何処へやった！？」

「それも答える義務はないな」

口元に笑みを浮かべながら爺さんが答える。……って事は、やっぱりお前が……っ！

「貴様ぁ……っ！！」

「落ち着けオッサン！多分『サークル』で消されたんだ！」

「さ、さーくるだとぉ？」

「早い話が奴を倒せば帰って来る！」

「成程――……じゃあてめぇは引っ込んでろ、その方が早くカタが着く！」

「おい、ちょ――っ！？」

右腕のガトリングガンが回転する機械音、それにやや遅れて弾丸の火薬が爆発する音がバッツの制止しようとする声を掻き消し、同時に銃口から飛び出た数多の弾丸は真っ直ぐに標的――老人を貫くべく一直線を描く。ガトリングはリボルバーやライフルの銃の類と違って、何発も連続的に発砲し、その一発一発の反動が大きい為照準を固定させるのはかなり難く、狙った所から徐々にズレてきちまう。だから遠くの物や小さい標的を狙うのは少々難しい事なんだが……その誤差を修正するのがこの俺様の腕の見せ所よ！

「ぐ、おおぉぉっ！！？」

爺さんの悲鳴と共に紫色の血飛沫が、高い所にいたせいもあって

雨のように降り注ぎ、教会の屋根や地面を紫色に染めていく。勿論下にいた俺も素早く俺の標的から離れたバッツも、少々だが紫色の雨に濡れた。……気持ち悪ぃ、「もっと頭使え」ってあの野郎にも怒鳴られそうだ。

数十発撃ち込んだ所で、発砲を止めた。銃口から煙が上がり、熱を帯びたガトリングガン付け根を火傷させるが、もうそれに慣れちまって痛いとも感じねぇし、そこんとこの皮膚はすっかり硬くなっちまって火傷って言っても俺の中で怪我の中に入るか分からねぇもんだ。

「……チッ、まだ立っていられるか」

吹っ飛んでもおかしくない威力だが、爺さんはさっきと同じように屋根の上に立っていた。当然の如く身に纏っていたローブは蜂の巣のように穴だらけとなり、そこから無数の風穴が姿を見せ、未だに心臓の鼓動と共に血が溢れている。

「あーもう！　血塗れじゃねーか！　うげ、しかも何か変な臭いするし……」

バッツが紫色に染まった服の臭いを嗅ぎながら俺の方に歩いてきた。怒っているかと思ったが、どうやらそうでもねぇらしい。

「――馬鹿な…っ！？　この私が、攻撃に反応出来なかった……っ！？　何なんだその武器は！！」

声を発する度に、爺さんの口から血が溢れる。こいつも銃を知らなかったようだ。

「さぁ、マリンを返してもらうぜ！」
「ふ、ふふふふ…ふはははははっ！　面白い、面白いぞ！　こうなったら――」
「変身なんてさせるかよ！」

手に持った剣を握り締め、バッツが飛び上がる。そして、一閃。

ごろん、と切り離された老人の首が屋根を転がり、地面に落ちる。それを追い掛けるように首を無くした肢体が屋根から転げ落ち、土煙を上げた。

本当に一瞬の出来事だった。油断していた爺さんは、何が起きたか分からねぇまま逝っちまっただろう。

刀を振って付着した血を振り落としながら、バッツがこっちを見た。握り拳をこっちに突き出し、ビッと親指を立てる。俺は銃を降ろし、少し間を開けてから言った。

「お前、容赦ないな」
「そうか？　俺は止めを刺しただけだし、アンタの方がずっと容赦がないんじゃないか？文字通り蜂の巣にしてさ」
「うっせーな、いいんだよ、俺は」
「何だよそれ」
「それはそーと、よ？」
「うん？」
「お前、あの爺さんから何か聞きたい事があったんじゃねぇのかよ？」
「……」
「……」
「……あ」

「とんだマヌケヤローだな……。で、マリンは？」
「おかしいな、もう――……っ！？　オッサン、危ない！！」
「あん？」

それは、ただの風だと思った。

少し衣服を揺らした風。それがどんどん強風になり、風が自分を中心として取り囲むように吹いている事に気付いた時にはもう遅かった。――風が、刃と化した。

「グ……っ！！」

俺を包み込むように生じた小さな、小さな竜巻。その中で俺は切り刻まれながら、竜のような姿の、魔物を見た。

×××

「――オッサン！！」

やはり首を胴体から切り離したくらいじゃ変身は防げなかったらしく、アルテロイテが転がり落ちた場所にはもう奴の姿はなく、代わりに姿を現したのは蛇のような竜を想像させる姿のジュラエイビ

ス――アルテロイテの、真の姿だ。

油断していた。俺がもっと早く奴の動きに気付いていれば――。

「大丈夫か、オッサン！」

「あ、あぁ……何とかな」

刃の竜巻から開放されたオッサンの身体は細かく切り刻まれ、一つ一つの傷が浅くてもこの数となると常人ならば意識を失っていてもおかしくはないだろう。あれだけ身体を鍛えているオッサンだからこそ声を出せているものの、それでも殆ど瀕死の状態だ。早く治してやらねーと！

屋根から飛び降りようとした、その時――。

「キシャアアア！！」

「チィっ！」

空中に身を投げ出した瞬間、真下からジュラエイビスの剥き出しになった鋭い牙が迫る。空中じゃ攻撃をかわす動作なんか出来やしない。かわそうとしたところで空中で満足に動く事が出来ない人間じゃ、結果が目に見えているようなもんだ。確か奴の牙には毒があったから――食らっちまったら、ちょっとばかしヤバイかな。

後ろに退けないなら前へ進むしかない。身体を下へ折り曲げ右手を開き、その掌を下に――迫るジュラエイビスの口へと向け、そして俺の中に宿る全魔力を集中させる。大爆発する火の玉を頭に描きながら、奴の口が手を呑み込もうとするのを待ち――……今だ！

ぽふん、と何処かマヌケな音が俺の耳に届いたその時にはジュラ

エイビスは一直線に俺に向かっていた軌道を変更し、掌の先から姿を消すと、俺のすぐ後ろを勢いよく上昇した。奴とすれ違い様に走った背中の激痛は、多分爪で抉られたんだろう。……俺が魔法に失敗したのは奴も予想外だったようで、手元が狂ったのか、傷口はそんなに深くなさそうだ。

「……ぽふん？」

地面へと落下中、さっきの擬音を口にしてみる。昔、魔法を使い過ぎた時によく聞いた音だ。具現化し切れなかった魔力は中途半端な形を形成しよう、形を維持しようとする。結果として魔法は発動する前に不発で終わる。つまり、ぽふん、って音は魔法が失敗した時――その魔法に対して必要な魔力が身体に備わっていなかった時の物だ。

『ファイガ』一発分の魔力もない？……そんな馬鹿な。数十分前までたっぷりと眠っていた筈だろ――。

真っ逆様に落ちていた身体に何とかバランスを取り戻し、足から地面に着地する。が、その衝撃が背中の傷を広げてしまったようで、痛さのあまり声を上げそうになった。一部分を治療するくらいならこれでも十分だ――そう思って、ジュラエイビスの姿を確認するより早く、『ケアルラ』を背中の傷をイメージしながら唱える。

二度目のぽふん、という音は、すぐ傍からの轟音によって掻き消された。オッサンの武器から発された巨大な火の玉が上から俺に噛み付こうとしたジュラエイビスを吹き飛ばし、瓦礫の山の中へと押しやったみたいだ。俺が見たのは派手な音と共に崩れていく瓦礫の山だけだから、実際は爪で引っ掻こうとしてたのかも知れないけど……まぁそんな事はどうだっていい。

魔法が、使えない。……確認したい事があるけど、後にしよう。

オッサンの濁声が聞こえる。

「――何ぼさっとしてる！！死にてぇのか！？」

「わ、悪い！オッサン、傷の方は大丈夫なのか？」

「頭っからエクスポーションをぶっ掛けた！　染みて死にそうなくらい痛かったけどよ、もう大丈夫だ！」

……やる事が豪快だな、このオッサン。頭からエクスポーション？　そりゃ染みるよ。

「なぁバッツ！　お前マテリア持ってねぇか！？」

「は？　まてりあ？」

聞いた事のない単語に首を傾げながら、俺は腰にぶら下がっているポーチからハイポーションのボトルを取り出し、開ける。ポーション類は基本的に身体が持つ回復力を異常なまでに促進させるアイテムだ。魔力を回復させるエーテル類は別だが、傷に掛けても飲んでもどちらでも効果が出る……が、前者の方が効き目が早い。オッサンの身体の傷も、やっぱり前者だからもう殆ど塞がってる。

背中に液体をぶっかけるなんて器用な真似出来ない俺は、ボトルをそのまま口へ運んだ。

「マテリアはマテリアだ、マ・テ・リ・ア！　まさかそれも知らねぇのかよっ！？」

「……」

「かーっ、マジかよ！　まぁいい、久々にそれも悪かねぇな！」

「……とにかく、あんな雑魚さっさと片付けようぜ、オッサン」

再び瓦礫の山が崩れ、そこから飛び出してきたのは、やはり一匹の竜。オッサンの攻撃はそこそこダメージがあったようで、硬い鱗が抉れ、その箇所から蠢く筋肉も垣間見る事も出来る。

右手に持っていた刀――正宗を魔法で異次元に戻し、代わり一本の大剣――エクスカリバーを召還し両手持ちで構える。オッサンも右腕を構えて、準備万端のようだ。

俺が一歩前に踏み出したその時、オッサンが口を開いた。

「バレット、だ」

「何が？」

「俺の名前だ。バレット＝ウォーレス、オッサンじゃねぇ」

「……分かった、覚えとくよ、オッサン」

「……」

オッサンは何か俺に言いたそうだったが、それが言葉になる事はなく、ジュラエイビスの奇声と共に俺とオッサンはほぼ同時に、走り出した。

To be next…

第四話　「VSジュラエイビス」

ミッドガルは、もう、廃墟。復旧作業は……中止。

復旧作業の手伝い――具体的に言うと、重労働してる皆に差し入れを用意したり、私でも持てるような軽い瓦礫を持ち運んだり――をしてた私は、リーブの口から直接そう告げられて、「ああ、やっぱりな」って思った。皆が頑張ってるから言わなかったし……ううん、言えなかったんだけど、戦いが終わって初めてミッドガルを訪れてからずっと、そんな気がしてた。私だけじゃない、きっと皆そう思ってたんだ。だから皆、それを告げられても否定せず、すんなりと受け入れられたんだ。

私だってミッドガルにそんなに深い思い入れなんてない。あるとすれば、初めて自分のお店が出せた事くらい、かな。……ううん、十分深い、よね。小さい頃からずっと夢だった、という訳じゃないけど、“セブンスヘブン”は私にとって、とても大きな存在だったって失った今、改めて感じてる。初めはある人の――クラウドの情報が欲しくって始めた酒場。いつの間にか常連さんが出来て、私の作ったカクテルが美味しいって言ってもらえるようになって、だんだん経営するのが楽しくなってきて――……。そして、バレットやマリン達に出会えたのも、“セブンスヘブン”のおかげだった。

……そのお店が、今、もうない。あの時はそんなに感慨深くなかった……というより、その事を考えてる暇が、あんまりなかった。あの時くらいからかな、運命の歯車が、急速に回り始めたのは。

反神羅組織“アバランチ”――つまり、私達を狙って神羅カンパニーが街を一つ、崩壊させた事件。その時、“セブンスヘブン”と

一緒に、大事な仲間達も死んでしまった。そして私達のせいで、沢山の罪もない人達が死んでしまった。……ホントに悪いのは奴らだってバレットは私を慰めてくれたけど、その夜、クラウドとバレットに気付かれないように外で一人で泣きじゃくった事も、未だに鮮明に覚えてる。

……未だに？

そんなに古い出来事じゃないのに。

色々、あり過ぎた。ホントに、あり過ぎた。戦いが全て終わっても尚忙しい日々のせいで記憶を整理する暇がなかったから、頭が少し、混乱してるように思う。何かしていないと不安だというのも、少しある。何かしてないと、溜め込んできた感情が一気に溢れそうになるのが、不安で仕方ない。その不安を打ち明ける相手も、今はいない。だから、もっと不安だ。

「ホント、何処行っちゃったんだろーね、クラウドは」

まるで私の心の内を読んだように、隣に座っていたユフィが言った。

「……うん、そうだね」

そう返事しながら、改めて周りを見てみる。

瓦礫の山。ここが元はどんな場所だったか、その原型すらない場所に、私達はそれぞれ思い思いにリーブの声が届く場所に座ってる。ユフィは私の隣に、シドはちょうどリーブを挟んだ私達の真向かいで煙草を吹かし、ナナキは…あ、そういえばコスモキャニオンに帰

ったんだっけ。後は元神羅カンパニーの社員達がいて、私と知り合いなのは結局皆だけ。とても少ないけど、仕方ないよね。クラウドはいつの間にか何処に消えちゃうし、ヴィンセントも行方不明だし、バレットはマリンと――……あっ！

「ユフィ、後でどんな話にまとまったか、教えてね」
「教えてね、って？あ、ちょっと何処行くのさ！」
「約束があったの、すっかり忘れてた」

私は立ち上がり、言った。

「バレットのとこ、行かなくちゃ」

闇の中の一筋の光
第四話　「ＶＳジュラエイビス」

大口を開き俺に向かって猛スピードで突進してきた竜は、その開いた口に何発も弾丸を撃ち込まれても怯む事はなく、てっきり奇声と共にのた打ち回ると予想していた俺は、寸前のところまで銃を撃ち続けていた為その攻撃を避ける事は出来なかった。だが、反応出来なかった訳じゃねぇ。

噛み付こうとした瞬間、そのスピードじゃどうやっても避けきれねぇと判断した俺は、小さく後ろへジャンプし威力を軽減させようとした。そうやって噛み付きを逃れ、突進のみのダメージになるっていう計算だったのだが、まずった事に銃を構えたままジャンプしちまった事に気付いた時には「時、既に遅し」だった。

ガキン、って音と共に義手に牙が食い込み、間接的にその感覚が右腕を伝う。勿論痛みなんか感じねぇが、もし生身の腕なら簡単に噛み千切られてる程の力だと、ミシミシと義手が軋む音が俺にそう思わせた。

身体が宙に浮き、俺は竜に押されるがままの状態だ。後ろには瓦礫の山、そこへこのまま叩き付けるつもりなんだろうか…いや、違う！地面と俺の足との距離が徐々に大きくなってきてやがる！

「――……コノ、野郎がぁっ！　いつまで俺の腕に噛み付いてやがる！！」

竜が俺の腕を銜えたまま上昇しようとするより早く、弾丸を再び発射させる。弾丸よかもっとでけぇのを喰らわせてやりたかったが…さっきバッツの野郎を助ける時に『ヘビーショット』を使っちまったせいで、当分はそういうのを撃てそうにねぇ。

「ギャァァァウ！！」

この近距離で腹ん中に鉛玉をぶち込まれるとさすがのコイツも我慢が出来なかったらしく、絶叫と共に牙から俺の右腕が解放すると、そのまま空へ逃げようとする竜の人間で言う首に当たる部分になるんだろうか――俺が『ヘビーショット』で鱗を吹き飛ばした部分を重点的に狙い続ける。その内俺の身体は重力に引かれてようやく地

面に辿り着き、まだ後ろへ吹き飛ぼうとする俺の身体を両足で踏ん張って止めようと…うおぉぉ、止まらねぇっ！！

「オッサン、翼を狙え！」

何処からか聞こえてきたバッツの声。って言われても、こんな状態じゃそんな細かい照準合わねぇっての！

「――うおっ！！」

結局、俺の身体は瓦礫にぶつかってやっと止まった。足と地面との摩擦で力を大分軽減させる事が出来たようで、さっき俺が竜を瓦礫へ吹き飛ばした時のように、俺の身体は瓦礫の中に埋もれる事はなかった。埋もれちまった日にゃ、さすがに風呂に入らねぇと臭ぇってマリンに嫌われる――って、今はそんな事考えてる暇ねぇ！

上空の竜の姿を見上げながら、俺は走った。結構高いところまで上がってやがるんで、ある程度近付かねぇと翼を狙うどころか身体に当てる事すら難しいんだ。チッ、バッツの野郎今更そんな厄介な注文しやがって――……まぁよくよく考えりゃ狙って当然のポイントか。気付かなかった俺が馬鹿だったってか。

「おいバッツ！てめぇボーっと突っ立ってねぇで何かしろよっ！」

上空の竜の丁度真下辺り、バッツはそこで上を見上げていた。……改めてその姿を見て気付いたが、バッツの手に握られていた剣はどこかに消え、代わりに手に握られていた武器は――……まさか弓か？

本で見た事がある、大昔狩り等で使われていた武器。早い話が矢

という弾丸を飛ばす、銃の原型となった武器だ。機械が発達し、あちこちに普及したのももう百年は前の話で、銃が初めて作られたのはそれより更に前の事だ。つまり、弓矢なんて武器、普通に考えれば今の時代にある筈が――。

いや、それよりコイツ、こんな結構でけぇモンを何処に持ってやがったんだ？

「オッサン！　俺が奴を撃ち落とすから止めは任せた！」

「待てよ、止めはお前が――」

俺が言い終わるより早く、バッツが弓矢を遥か上空へ向けて放った。いくらなんでも弓で射抜くには遠過ぎるだろうという俺の考えは、次の一瞬には掻き消された。

放たれた矢は“弧”さえ描かなかった。バッツが狙った通り一直線に竜へ向けて飛んでいく様は、俺が言って似合う言葉じゃねぇが、何処と無く優雅だ。重力に引かれる事もなく、勢いは止まるどころか増していく。突き刺さるんじゃなくて貫通するんじゃねぇかって思ったくらいだ。

竜が自分を貫かんとする矢に気付いた時には、矢は既に竜に近いところにあった。身体をくねらせて避けようとしたんだろうが、生憎バッツの狙いは身体じゃなく――丁度俺の身体の大きさくらいの、翼だ。

バスン、と音がして竜の一枚の翼に一本の弓矢が通り過ぎていったとは思えない程の大きな穴が開き、慌てたようにバタつくその翼は空気を上手く仰ぐ事はなく、竜は自重と重力によって地面へと落ちていく。それでも穴の開いていない方の翼でもがいているが、片

方ではバランスが取れないようで、効果は皆無のようだ。

「ギッ、ガアァァッ！！」

竜が奇声を上げたのは俺の耳に二つの風を切る音が聞こえた直後だ。バッツがまた二発続けて放った矢が、一本はもう一枚の翼を貫き、もう一本は竜の丁度胸の辺りになるだろうか――に深々と突き刺さったんだ。大した腕だ……つーか、やはり何者なんだ？

「ジュラエイビスの翼はすぐ再生する！　奴が地面に落ちたらすぐに攻撃してくれ！！」

「お、おう！」

とにかく今は敵を倒すのが先決だ。考えるのは後にして、ついでに何故バッツに指示されなきゃいけないんだという不満も今は押し殺して、俺は走った。

ジュラなんとかの身体は結構重量があるらしく、落下と同時に大地が揺れ、轟音が空気を震わせ、土埃が高々と舞い上がった。瓦礫の上に落下しなかっただけありがたいが、土埃のせいで何も見えねぇ。大体そこら辺にいるだろうという少しいい加減な感覚で、俺は土埃に向かって銃を乱射した。

「オッサン、やっぱ止めは俺が頂く！」

いつの間にか再び剣に武器を持ち替えたバッツが後ろから俺の頭を飛び越え、土埃の中へ姿を消した。当然の如く俺の攻撃はストップせざるを得なくなり、銃声が消えると辺りがやけに静かに感じた。

――ならハナっからそう言いやがれぇっ！

×××

この音は…バレット？

教会まであと数分――のところで突然私の耳に届いた、少し離れた場所から聞こえる、ガトリングガンの銃声。私にとってそれはもう聞き慣れた音で、しかもこの音は特に聞き覚えがある。……バレットの銃の音だ。

何かあったんだ。

でも、一体何が？

あの辺りには魔物も出ない筈だし、まぁ物資不足だから追剥くらい出るかも知れないけど、バレットが銃を撃つ程の相手じゃないし、大体あんな筋肉達磨みたいな大男からお金や食べ物を奪い取ろうとする人なんていない。

少し、嫌な予感がする。

……マリンは無事なんでしょうね。

私の足は次第に早足になり、やがて走るようになった。

×××

ジュラエイビスの首をあっという間に斬り落としておいて、そんな事ないだろうと言われるかも知れないが、きっとそうだ。今やっと、確信出来た。

俺は、弱くなった。

油断していただけ、という訳では決してない――剣を収め、ズキズキと痛む脇腹を手で押さえながら、考える。

何処がどう弱くなったのか、と聞かれればそれに答えられる自信なんてないが、自分の事は自分が一番良く分かっている。今の俺は明らかに、“奴”と対峙した時より、力は勿論魔力、敏捷性や判断力、洞察力さえも劣っている…ように感じる。イメージ通りに身体が動いてくれない、というのもある。

確認した訳ではないが、原因は多分分かってる。それを確かめるように、今度は最も効果の弱い治癒魔法『ケアル』を脇腹に向けて

唱える。

少し眩しくて、それでいて温かい光が傷を包み込むように生じ、痛みを和らげていく。出血を止めるくらいしか回復しないが、元々そういう効果だ。…これで、俺が魔法を使えなくなった訳ではない、という事がはっきりした。……やっぱり、そういう事か。

風が吹き、俺と首と胴体が二つに分けられた竜の亡骸を包み込んでいた土埃を何処かへ押し流していく。途端、俺の目に映る、一人の男……そういや、バレットって名乗ってたっけ。

「ようバレット、悪いね」

「…別に獲物の獲り合いなんてする気はねーよ。っと、お前その傷――」

「ん、あぁ……あんまり視界が悪い時に突っ込んだもんだから、不運にももがいてる奴の爪が当たっただけだ。そんなに深い傷じゃないし……あ、ハイポーションあったら一つくれないか？」

バレットは無言でジャケットのポケットから一本のボトルを取り出し、俺に放り投げた。結構勢いよく投げられたもんだから手でキャッチすると、パシン、と心地よい音がする。礼を言おうと口を開きかけた瞬間、後ろの方で何かが倒れたような、ドサッ、って音がした。

「――マリン！！」

どうやら“あっち側”から無事に帰って来られたらしく、ピンクのワンピースに身を包んだ少女は、パッと見る限り傷一つない状態で地面に倒れていた。

『サークル』って魔法は人を異次元へと消し去る魔法。この類の魔法は、魔法効果除去の『デスペル』を唱えるか一定時間経過する事で効果がなくなるが、『サークル』は特殊で強力な魔法で、術者を倒さない限り効果は半永久的に持続する。俺も以前奴と戦った時、“あっち側”へと消された事があったが…意識があるだけで、何も見えたり聞こえたりしなかった。きっと少女もそうだったんだろう。

バレットが気絶しているマリンを背負い、こっちに向き直った。

「ありがとよ、手伝ってくれたおかげで無事にマリンが戻ってきた」

「……いや、別に礼を言われる程の事じゃ――」

「もしかしたらアルテロイテがここにいたのは、俺がここにいたせいかもしれない」なんて言ったら、バレットはどんな顔するだろうか……とくだらない事を考えてしまい、俺は頭を掻いた。もしかしたら、と少しそう思ってみたが、奴は俺がここにいた事に驚いていたから、きっとそういう訳じゃないんだろう。別のもっと、大きな理由がある筈だ。勿論それを知る術なんて、奴を倒してしまった今、ないんだけど。

「照れるなよ、バッツ」

「照れちゃいないさ」

俺が頭を掻いたのがどうやら照れていると思われたらしい。ま、いっか。

「腹減ったな……なんか食わしてくれよ、オッサン」

「おいおい、さっき名前で呼んでくれたじゃねーか。あれはあん時だけかぁ？」

「あん時だけだよ」

「けっ、しれーっと言いやがって。……あぁそうだ、バッツ」
「何だよ？」
「お前、記憶喪失っての……あれウソだろ？」
「……バレた？」

苦笑した俺の背中に突如走った悪寒。それが何を意味するか察する暇もなく、後ろからの何者かの殺気にも似た気配に気付いた時には――一瞬、首筋に走った衝撃で意識が飛んだ。

前のめりに倒れる俺が最後に見たのは、長い黒髪、白いシャツ、そしてミニスカートを穿いた――……女の姿だった。

――女にやられるなんて、やっぱり俺は、弱く……。

抗う事さえ出来ず、俺の意識は闇の中へと落ちていった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｎｅｘｔ…

第五話　「紅い大地の上で」

夢を、見た。

ううん、もしかしたら夢じゃないかも知れない。

おじいちゃんが私を呼んでる…そんな夢。

『起きろ』

『目を覚ませ』

『使命を思い出せ』

『クリスタルを守れ』

『奴はすぐそこまで来ている』

……言われた事を断片的に思い出しながら、私はゆっくりと目を開いた。そんなに長く眠っていた筈じゃなかったのに、久しぶりに目を開いたように、眩しくて何も見えなかった。見えたのは白いような色でも黄色いような色でもなく、まるで炎が目の前にあるかのような、真っ赤な色。少し我慢して目を開け続けようとしたけど、やっぱり眩し過ぎて、また目を閉じる。

ここは、何処なんだろう？

一度大きく呼吸し、記憶を整理する。

“奴”と戦って、負けた。瀕死の状態で、私達を呑み込もうとするブラックホールを見た。

もうダメだと思った。死ぬんだなって思った。

もう、終わりなんだなって、思った。

――……だけど、私は今、生きてるみたい。

……皆も、無事なのかな？

そう考えると急に不安になり、思い切ってまた目を開け、上半身を持ち上げるとここが何処か確認しようとする。途端、全身に痛みが走り、自分が怪我してる事に初めて気付いた。ずきん、ずきんとまるで私の鼓動に合わせるように、身体が痛む。

やがて目が光に慣れ、周りの風景が映る。私が横になっていたのはちゃんとしたベッドで、何かの飲み物が入ったボトルやグラスが置いてあるテーブルがすぐ傍にあり、その向こう側にはソファが見える。赤い、眩しい光は夕日だったようで、この部屋に二つある窓から差し込むその光が、ずっと私を包み込んでくれてたみたい。扉はなくて、代わりにあるのは縦に伸びてる梯子。

……何処？

一見、誰かの部屋のようだけど――。

「目が覚めたかい？」

ひょい、と突然梯子の下――下の部屋から跳んできたのかな――

から、何か紅い……犬みたいな動物が部屋に飛び込んできた。赤いお鼻、綺麗なオレンジ色の毛肌、燃えるような真紅の鬣。その身体は古傷があったり刺青があったりで少し怖かったけど、すぐにその子が“良い子”だって分かった。だって、とても優しい目、してるもん。

魔物、じゃないようだけれど……初めて見る、動物。

その動物がやがて、私が寝ていたベッドの前までやってきて、お座りし、炎が灯った尻尾をくねくねと――って、えええぇぇっ！？

「気分はどう？　食欲は――」

「ぶ、ブリザドぉっ！」

「えっ、ちょっ……うわぁぁぁっ！！」

闇の中の一筋の光

第五話　「紅い大地の上で」

ひ、ひどい目に遭った……。

少し火の勢いが小さくなった尻尾を後ろ目に見ながら、オイラはハァーっと長い溜息を吐き、ベッドの上の女の子に向き直った。１

0歳くらいの、黄色くて長い髪を後ろで結った女の子。珍しい事にオイラの姿を初めて見る割には、驚いたような素振りを見せなかった。

オイラの種族はもうオイラしかいないし、オイラ達は元々このコスモキャニオンを出る事はなかったから、この女の子もオイラを初めて見る筈。人の言葉を理解し、話せる、獣――それがオイラの種族。普通、オイラを初めて見たら普通の人は大抵驚き、逃げ出したり攻撃を仕掛けてきたりするなんて人もいる。この女の子に平然とされるなんて、逆にオイラが驚きで、何処となくオイラの方が違和感を感じちゃうよ。

勿論、突然尻尾の火を目掛けて『ブリザド』を唱えられたのだって、初めてだ。

「ゴメンね。尻尾、大丈夫？」
「うん、『ケアル』唱えてくれたおかげでもう良くなったよ」
「良かったぁ。霜焼になったら遠慮なく言ってね、また『ケアル』してあげるから」
「それは大丈夫だと思うけど……でもその時は頼むよ」

やっぱり、この女の子は何の違和感もなく、オイラと話せる。……初めてなのに、何で？

クラウド達だってオイラと話すのに慣れるまで少しばかり時間が掛かった。あの時は色々と慌しかったから意外と時間が掛からなかったけど…。そういえばあの頃のオイラ、ずっと背伸びして話してたっけ。……あーやめやめ！　思い出すだけで恥ずかしくなっちゃうよ！

ぶるぶると首を横に振り、脳裏の“あの頃”を掻き消し、口を開く。

「ねぇ、君の名前は？」
「クルル」
「クルル、か。ふーん、可愛い名前だね」
「そ、そう？　そんな事言われたの、初めてだよ。あなたは？」
「オイラはナナキ。またの名を――……ん、いや、何でもない」
「ナナキ君。うん、カッコイイ名前だね」
「……ありがとう」

お世辞でも何でも、そう言われると嬉しくなっちゃう。簡単な自己紹介が終わったところで色々と聞きたい事とかあったんだけど、まず先にやらなきゃならない事があるみたい。

クゥゥ。

「……聞こえた？」

女の子が少し顔を赤くして、オイラを見ている。勿論聞こえたよ、お腹の音。でもオイラは聞こえなかったフリをして、尻尾をゆらゆらと動かした。

「何が？」
「……ううん、何でもない！」
「そうそう、お腹空いてない？　そろそろ食事が出来上がる頃だけど、食欲はあるかい？」
「え……頂いていいの？」
「うん、持って来させるからちょっと待っててね」

そう言うとオイラは踵を返し、ひょいっと床を蹴って下の部屋に通じている穴へと飛び込んだ。下の部屋へ着地し、その足で研究所を出て、また梯子で繋がってる穴へと飛び込む。その先にあるのは、“無用の扉”と呼ばれる扉と、他の部屋に通じている穴。

その“無用の扉”の前で、オイラは立ち止まった。……今はもう閉まってて、また開く事はないみたいだ。

大体一時間前、オイラは食事をする為にじっちゃんの研究所からこの扉の前へ通り掛った。石と化しても尚、このコスモキャニオンを守り続ける父ちゃんの事を思いながら、オイラはこの扉を横目で見た――その時だった。“無用の扉”が、突然開いたんだ。オイラは何もしていないのに……というか、開け方すら知らないのに。

誰かの悪戯で装置が偶然動いたんじゃないかって思ったけど、そのフロアにいたのはオイラ一匹。それなのに、扉はまるでオイラを手招くかのように、開いた。ドクン、と胸の鼓動が高まるのを感じながら、恐る恐るその扉を潜り、暫く歩いたところで倒れていたあの女の子――クルルを見つけた。

……何者なんだろう、あの子。見た事ない格好してるし――なんて考えながら、扉を通り過ぎてある部屋へと向かった。甘い、良い匂いがする、厨房だ。入ると体の良いオバさん――コックさんがすぐにオイラに気付き、笑顔を見せた。

「ナナキ様、たった今出来上がったところです。例の女の子は――」
「大丈夫、起きてるよ。随分とお腹が減ってるみたいだから、すぐに頼むよ」
「分かりました。ナナキ様は先に部屋に戻っていて下さい。すぐお持ちしますから」

「うん。ゴメンね、余計な手間掛けさせちゃって」
「何をおっしゃるんですか」

コックさんは笑顔を崩す事なく、こっちの心配はいらないよとばかりにまたお鍋の方に向き直った。オイラは小さく頭を下げ、厨房を出た。気付けば“無用の扉”のフロアには料理のいい匂いが充満してるみたいで、オイラの鼻はさっきからヒクヒクして止まらない。

少し歩き、また、“無用の扉”の前で立ち止まる。

……何だろう。この胸に渦巻くもやもやしたモノは。

実はクルルを見つけた時から、ずっとこの胸のもやもやがある。何かを思い出せそうでなかなか思い出せないような、何かを言いたくて言い出せないような……変な感じ。本能がオイラに何かを訴えようとしているかも知れない。けど、何かって、何？

時が立つにつれて、そのもやもやがどんどんとはっきりしたモノになってくるのが分かる。

「……嫌な、感じだな」

そう口にして、オイラは研究所へと戻り始めた。

×××

……行っちゃった、あの子。

“あの子”なんて言い方してるけど、ナナキ君はやっぱり私より年上なんだろうなぁ。でもやっぱり、“あの子”の方でいいや。

一人ベッドの上に残された私。とりあえず、ボフン、と上半身をまたベッドへと倒し、また記憶を整理し始めるも、所々記憶が途切れてるからやっぱりまとまらない。さっき見たおじいちゃんの夢さえ、イマイチ覚えてない。夢って、元々そういうものだけどね。

確か、『クリスタルを守れ』『奴はすぐそこまで来ている』って言ってた。

クリスタルを守れって、どういう事？　クリスタルはもう――……。

クリスタルはもう、存在しない。全ての自然の源である風、火、水、土の四つのクリスタルは全て砕かれ、そして“奴”の封印が解かれた。また私の世界のクリスタルも、全て砕け散ってしまった。あるのは砕かれたクリスタルの欠片だけだけど、私達が持ってるそれを“奴”が狙う事なんて一度もなかった。

“奴”がすぐそこまで来てるのなら、こうしてる暇なんてない。だけど――。

……怖い。

怖くて怖くて、仕方がない。

敗北を知ってしまったから、勝利を掴む事は私じゃ出来ない事が分かったから。

だから、怖い。

また“奴”と戦っても、結果が見えてる。そんな戦いなら、初めからしたくもない。

……。

……どうしてだろう、涙が溢れてくる。

自分が不甲斐ないから？

期待に答えられなかったから？

……違う。今はただ、寂しいんだ。

一人ぼっちは嫌なんだ。

誰か傍にいて欲しい。

今は、ただ、それだけ……。

涙で滲んで、天井がぼやけて見える。私は涙を拭おうともせず、

ぼんやりと天井を眺めていた。時折溜息を吐いては、また、涙が頬を伝う。

いつから私、こんなに弱くなっちゃったんだろう。

……今まで戦って来れたのは、仲間がいたから？

仲間がいないと……一人ぼっちだと、私はダメなの？

……『強く生きる』って、難しいよ、おじいちゃん。

「――……泣いてるのかい？」

ずっと塞ぎこんでいたせいで全くその存在に気付かなかったけど、突然すぐ近くからナナキ君の声がして私は身体をびくんと震わせて驚いた。慌てて涙を拭い、上半身を持ち上げる。心配そうな表情を浮かべたナナキ君が、そこにいた。

「泣いて、ないよ」

誤魔化しきれない事は分かってる。私の目はきっと赤くなっちゃってるだろうし。だけど、私は強がっていたかったんだと思う。皆の前ではずっと、どんな状況でも強がっていたから、無意識にそうなっちゃったんだ。私の、悪いところ……かな。

「……そう、ならいいけど」

そう言ってナナキ君はベッドのすぐ傍までやって来ると、まじまじと私の顔を見つめた。

「な、何？」
「怪我はもう良くなったみたいだね。立てる？」
「……うん」

私は下半身に掛かっていた布団を爪先の方に折り畳み、身体を動かした。……うん、足もちゃんと動く。

「一人で大丈夫？」
「うん」

やっぱり少し心配そうにナナキ君が言う。でも、大丈夫じゃないって言っても、ナナキ君じゃ私に肩を貸す事は出来ないよね。二本足で立ち、頑張って私に肩を貸そうとするナナキ君の姿を想像してしまい、思わず口元がニヤける。

「よっ、と」

床に足を下ろし、ベッドの淵に手を添えながら体重を徐々に両足へと向ける。大丈夫、身体も痛くないし、ちゃんと立てる。……あれ？　私、自分に『ケアル』なんて唱えたっけ？

「もしかしてずっと私は介抱してくれてたの？」
「……そりゃあ見つけた時は大怪我だったからさ。放っとけないよ」
「ありがとう、ナナキ君」
「どういたしまして」

ナナキ君は照れたように笑った。私も笑おうとしたけど、そうするより早く口が動いていた。さっきのナナキ君の言葉。気になった事。

「ねぇ、私を見つけた時って……私はどうしてここに？」

その言葉に、ナナキ君が今度は眉間に皺を寄せた。

「記憶喪失なのかい？」

「……」

そう言われると答えづらい。記憶は失っていないけど、確かに私がここに至る記憶が一切ないのは、記憶喪失の類に入るかもしれない。でも、ここは正直に言ってみようかな。

「そういう訳じゃないけど……私がどうやってここに来たかは全く覚えてないの」

「ふぅん…何処の村の出身だい？」

「バル城だけど」

「……ばる？」

怪訝そうな顔でナナキ君が私の顔を見上げる。

……バル城を知らない？

「ここ、何て村？」

「コスモキャニオンだよ」

……知らない名前。あれだけ世界中を飛空艇で旅して、まだ訪れた事のない場所があった？そんな事ない。

ここはきっと、バッツがいた世界でも、私がいた世界でも、元通りになった世界でもない。私が知らない、異世界だ。そう考えるとナナキ君がバル城を知らない事や、私が知らない村がある事も説明

出来る。だけど、一体どうして？

「――ナナキ様ぁ！　お食事は下に置いておきますので！」

「分かった、ありがとう！」

下の部屋から聞こえてきた声に、ナナキ君はすぐに返事をし、そろりと梯子へと歩み寄った。

「……とにかく、食事にしようか。オイラもうお腹が減っちゃって…」

「腹が減っては戦は出来ない」と大昔の言葉を思い出しながら、私は下の部屋へ飛び降りたナナキ君の後を追った。

この時、私は――。

徐々に忍び寄る“奴”の気配に、まだ、気付く事はなかった。

To Be Next…

第六話　「混沌より生まれしモノ」

「……ほぇ？」

すっ呆けたような声。一瞬、それが私自身が発した物だとは分からず、バレットは呆れた顔のままもう一度口を開いた。

「だーかーら、コイツは悪い奴なんかじゃねェんだよ！　あーあー、完全にノビちまってら」

バレットが言う“コイツ”というのは、私のダンカン流『飛び廻し蹴り』を首にもろに食らって、地面に突っ伏してる変な格好の男の人の事。つまり、私が悪い奴だと思って思いっきり蹴り飛ばした男の人は、全然悪い奴じゃなかったって事？

「で、でも変わった格好してるし、マリンは気絶しちゃってるし、バレットもそんなボロボロだし……」

「だからって何の確証も無しに攻撃を仕掛けたりするか、フツー？」

「だ、だってだって……」

何だか私はとんでもない事をしでかしちゃったみたいで、それでも自分を正当化しようとバレットに何か言い訳をしてみても自分に非があるのは火を見るより明らかで、バレットの少し冷たい目線が突き刺さるともう何も言えなかった。変な格好の――……って言うのは失礼かな――茶髪の男の人は死んでしまっているかのようにグッタリしてて、私がちょちょい、と指先で身体を突いてみても何の反応も示さなかった。だけどちゃんと胸が上下してるのが見える。

……うん、生きてる。良かった良かった。

うんうんと頷いている私を見るバレットの目は、やっぱり冷たい。

「バカヤロ、なーに『生きてるなら万事おっけー』みてーな顔してやがる！」

「べ、別にそんな事――」

なんだかんだで付き合いの長いバレットは私の事をよく分かってる。いつか私がちょっと無理矢理に明るく振舞ってみた時、彼も何も言わずに一緒に笑ってくれたし、いつか私が少し一人になりたいって思った時も、彼は何も言わずに……ね。嬉しいんだけど、自分に都合の悪い事とか隠したい事を隠し通せないんだよね。私ってそんなに自分の意思を顔に出してるのかな？

なんて考えてる間にバレットはひょいとマリンを両手で大事そうに抱き、私を見ていた。目が合った途端、彼はくいくい、と冷た～い視線と顎でその倒れてる茶髪の男の人を指した。

まさかとは思うんだけど――。

「そのまさか、だ」

……バレットには敵わない。何で私の考えてる事を先読み出来るかな？ここまで来ると彼はエスパーじゃないかとも思えてくる。

私は少し渋々と茶髪の男の人に歩み寄り、そっとその身体を持ち上げた。重いだろうなぁとは思ってたけど、予想以上に重かった。持ち上げた瞬間、思わず足元がふらついたくらいだからね。

私が男の人を抱き上げるのを確認したバレットが歩き出し、私は少し早足で歩き、彼の横へ並んだ。

「それで、何があったの？」
「ちょっとな」
「ちょっとって何よ？」
「うるせーなぁ、俺にもよく分かんねぇんだよ」

しゃーねぇ、とぼかしにバレットは一つ溜息を吐き、言った。

「マリンと教会に行った。そしたらあの花畑の上に、この男が倒れてやがったんだ」
「それで？」
「それで……あぁもうめんどくせぇっ！　バッツを起こして奴に聞け！」
「ばっつ？　この人の名前？」
「……」

頭が弱い、って言ったら変な言葉だけど、ようするにバレットのおつむはそんなによろしくない訳で、自分で話を要約したりするのは大の苦手。以前何度も何度もクラウドや私が色々と話をまとめて話してあげた事もある。外見の通り、腕っ節で勝負する彼らしいけどね。

まぁ、ちょっとしつこいくらいに質問する私も私だけど。

「お前……さっきの事反省してねぇな？」
「そんな事ないよ！ちゃんと反省してる」
「……ならいいがよ」
「そんな事は置いといて、結局、この人は何者なの？」

ダメ元で聞いてみる。「知らん」とはっきり言うだろうなぁ……

って思ってた私の予想は大きく外れた。

「……星の王子様だ」

冗談だと意識しているせいか、そう言ったバレットの顔が可笑しくて、私は思わず笑った。

闇の中の一筋の光
第六話　「混沌より生まれしモノ」

はぁー。

どーでもいーけどあのリーブの話って堅っ苦しくて嫌いなのよねー。もっと要点だけを簡潔に話せばいいのに、前置きやら何やらでティファがどっか行ってから全っ然話が進んでないし。あーもう、ティファも何処行っちゃったんだよー。一応シドもいるけど一人でこんな話聞いてるのはアタシにとっちゃキツ過ぎっ！　暇っ！　退屈っ！！

言っちゃ悪いけど、アタシにはま～ったくこのミッドガルに思い入れなんてないし、こんな場所が廃墟になろーが何になろーが、アタシには関係ないのよね。

……そりゃあさ、ここに住んでた人の気持ち考えるとそんな事言ってられないんだけどさ。もしミッドガルじゃなくて、アタシの故郷のウータイにメテオが降って来ていたら――……アタシは今頃気が気でなくなってると思う。想像しただけで胸が締め付けられる。……きゅん、って、痛い。

こんな痛みを、ここに住んでた人は今、感じてるのかなぁ……。

……。

って、何でアタシがこんな“おセンチ”にならなきゃならないんだーっ！！

全部私一人を置いてけぼりにしたティファのせいだ！戻って来たら延々と愚痴ってや――ら？

突然しゃがみ込んでた私を影が包んだ。ずっと下向けだった視線を徐々に上げていくと同時に映る、二本の足。この靴は――ってか、この臭い……煙草……って事は。

「おうユフィ、おめーちゃんと話聞いてただろうな？」

真上からシドの濁声がする。けどアタシはそれ以上視線を上げるのを止めて、また視線を落とした。別にシドの顔なんて見たくないし、わざわざ話をするからって見てやる必要もないし、ってかあの親父の顔なんて見飽きたしね。

無視しても良かったんだけど、ま、そこはさすが親切なアタシ？って感じで答えてあげる。

「うん、ぜーんぜん」
「かーっ！　……だろーと思ったぜ、ったくよぉ！」
「ユフィさんらしいですけどね」

前の方からまた別の男の声。さっきまで大演説やってた……リーブの声だ。

「要するに、この状況ではミッドガルの復旧は絶望的です。……いえ、正確に言うと希望はあるにはあるのですが――」
「おらリーブ、話をややこしく捻じ曲げようとしてんじゃねェよ。この生意気な小娘さんでも分かるよーに話してやれや」
「何だとぉっ！？」

生意気？　小娘？　じょーとーじゃん！

拳を握り締めて立ち上がった私の目に映ったシドとリーブの顔、それと――あれ？　確かさっきまでここに沢山の元神羅の連中がいた筈なんだけど……いない。人がいなくなって改めて分かったけど、ここは本当に瓦礫の山だった。私がさっきまで座っていたのも神羅ビルの一部だし、立っている足元だって、地面じゃなく、何かしらの残骸だ。

握り締めた拳。このアタシに暴言吐いたシドの顔面にシュシュシュってぶちかましてやろうとした拳が今、自然と力を失くしてく。同時にほんの少し荒立った気持ちが落ち着いてく。

立ち上がって１０秒程経った頃、リーブが静かに口を開いた。

「……続けます。戒め…という訳ではないのですが、この出来事を

歴史に深く刻むためにこのミッドガルをこの状態のまま保管し、そしてミッドガルを取り囲むような形で新しい街を作る――そんな事を思いつきました。先程その考えを皆さんに聞いて頂いたのです」
「ここに誰もいなくなったって事は、その考えが通ったワケだ」
「はい。彼らには一旦カームの方へ戻って頂き、新しい街の設計が出来上がるまで身体を休めてもらう事にしました。かなりの重労働になるでしょうからね」
「そんで俺様達も一旦解散……っていきてぇとこだが、俺様はリーブに付き合う事にした。“アレ”がないと材料の持ち運びが不便だろうからな！　ユフィ、お前はどうするんでぃ？」

……って言われてもな。

「ウータイに帰るってんならすぐに送ってやるぜ」
「アタシは……」

ウータイには別に帰りたいとは思ってないし、だからと言って他に行く所もやる事もない。あるとすればシドと同じようにリーブの手伝いをする事だけど……移動手段が“アレ”じゃあなぁ…。ウップ。“アレ”に乗る事を想像しただけでコレだよ。

とりあえず……ティファ達の意見を聞いてから決めようかな。うん、そうするか！

で、ティファは何処行ったんだっけ？

――そう思った時だった。

ぞくり、と背筋に悪寒が走った。

「――ユフィ、伏せろ！」

シドに無理矢理頭を押さえつけられ、その直後頭の上で響く、金属と金属が激しくぶつかるような音。何か、後ろにいる。何か――ヒトじゃない、ナニカが。

アタシは身を翻すようにシドの手から逃れ、その勢いを利用してナニカに廻し蹴りを繰り出す。重い衝撃が足にあった。ふふん、直撃だね今のは。

「バカヤロ！　やるならやるって言いやがれっ！！」

アタシの頭を押さえてた手のせいで身体のバランスを少し崩したシドが言うけど、アタシはそれをあっけなく無視し、隠し持ってたクナイを両手に一本ずつ持ちながら蹴り飛ばしたナニカの姿を目で確認する。

アタシは思わず、あんぐりと口を開いた。

「でかっ……」

ソレをいっちばん伝えやすく言うと、ベヒーモス。ただ、ベヒーモスより一回りも二回り大きく黒い身体、４本の足に2本の腕、何本も不規則に並ぶアタシの身長くらいある鋭い牙――。そのでっかい顔が、アタシの目の前にあった。さっきアタシが蹴り飛ばしたのは、そのでっかい牙だった。

その口が、開いた。アタシなんて一口で入る大きさだ。

「なーんでこんなんがこぉーーーんなに近くになるまで黙ってるか

なぁっ！！？」

叫びながらバックステップし、間合いを取る。

「知るか、いっきなし出てきやがったんだよ！！　つーかそれが命の恩人に対する態度かぁ！？」

「るっさいな！　今はそれどころじゃないっしょ！？」

「フったのはおめーの方だろがっ！」

両手を持ったクナイを構えながら、私はじりじりとまた、後ろへと下がる。気付けばリーブがいない。……あんにゃろ、逃げたなぁ！？

……って今は本当にそれどころじゃない。こんな相手に、クナイ2本じゃ心ともなさ過ぎ。得意の大手裏剣は飛空挺ハイウインドに積みっぱなしだし、そういえばシドの槍も確かハイウインドに――……そう思いながら、同じようにじりじりと後ろへ下がるシドの得物を見る。

ぶっ！

アタシともあろう者が、思わず吹いてしまった。だって――。

「こらぁっ、アンタ“モップ”って……っ！！」

モップに助けられたアタシって……嗚呼。

「しゃーねぇだろがっ！　近くに落ちてたんだよ！！」

「こんな相手に通用するかぁ！！」

「そう言うならおめーのその武器もだろ！」

「アタシのはまだ刃物だ！　殺傷力はこっちの方が――うぉっと！」
「ちっ！」

でっかいベヒーモスみたいな奴の爪がアタシ達に振り下ろされ、間一髪で回避するもその威力は凄まじく、勢い余った爪は地面を砕き、礫を粉々にして辺りに吹き飛ばした。勿論跳んで避けたアタシにも細かい破片が飛んできて、柔肌に幾つかの傷を付けた。じわじわとした痛み…多分、血が出てる傷もある。

アタシ達が攻撃を避けた事に、そいつは驚いたような表情を見せた。

「……ヤハリ、貴様ラハタダノ雑魚デハナイヨウダナ」

そいつが言う。――ってか喋った！？

「言葉が通じるんなら話が早ぇ！　やいやいやい、いきなり俺様達に攻撃を仕掛けるたぁ何モンだてめぇは！！」
「……我ガ名ハ“ツインタニア”。闘イヲ喜ビトスル者。成程、コノ星ノ人間モ、少シハ楽シマセテクレソウダ」
「楽しくじゃれあいたいってんなら、ちゃんとした武器を取ってくるからここでおとなしーく待っててくれるとありがたいんだがなぁ？」
「そりゃあモップじゃ勝てる相手じゃなさそうだもんね！」
「うるせぃ！」
「――残念ダガ、我ハ今、人間ヲ殺シタクテ仕方ナイ。マズハソノ欲求ヲ満タスノガ……先決ダ！」

咆哮と共に、ツインタニアを中心に突風が生じる。足元の瓦礫が宙に浮き、舞う。アタシとシドは吹き飛ばされないよう、風の影響

を少しでも少なくするため身を屈め、様子を伺っていた――けど、それはただの風じゃなかった。

「――いいっ！？」

見えない刃。風が鋭利な刃物に変化したかのように、身体を横切っていく度に激痛が走り、鮮血がその刃と共に散っていく。まるで魔法の『エアロ』みたいだけど、威力はケタが違った。

……魔法？　しまった！　マテリアも飛空挺に積んだままだ！　それどころかポーションとかも積んだまま――……こりゃマジでヤバっ！　治療薬までないなんて激ヤバじゃん！

「くぅ～、効くぅ～っ！！」

「ケッ、そんだけ声が出せりゃ大した怪我じゃなさそうだな」

「そーゆーアンタもね、シド」

風が収まった瞬間、アタシとシドはほぼ同時に攻撃に転じようとした――んだけど、断然ツインタニアの方が早かった。顔を庇っていた両腕を退かしたアタシの目に映ったのは、自分に振り下ろされようとしている鋭い爪。くっそー、図体の割に素早過ぎだってのっ！！

横に跳躍した直後、轟音と共にさっきまで自分が立っていた地面が粉々に砕け散る。アタシは宙に浮かんだままの状態で右手のクナイをツインタニアの片目目掛けて投げ、一度宙返りしてから着地し、投げたクナイを確認するけど、やっぱり目に突き刺さってなかった。あーもう、目ん玉まで硬いなんてやりづらいよ！

攻撃を仕掛けたせいか、それともこのアタシが可愛過ぎるせいか、

あいつの標的はアタシに決まっちゃったみたいで、またアタシに向けて爪を振り上げた。でもま、あんたの獲物はもー一人いるって事忘れてるんじゃない？

「せいやぁっ！！」

高々と跳躍したシドが勢いよくツインタニアに落ちてきて、その勢いのままモップを脳天に叩き付けた。いつのもシドなら突き刺してるんだけど……まぁモップだしね、悪い判断じゃない。

でもやっぱり、モップは折れちゃったねぇ、シド。

さすがにモップでも多少の威力はあったのか、ツインタニアが一瞬、怯む。チャンスだ、もう一回かましてやる――。その隙を突き、アタシはまずツインタニアの前足を踏み台にして身体を駆け上がり、もう一本のクナイを左目に全力で突き刺した。肉を抉るような生々しい感触がクナイを通して手に伝わり、鮮血の生暖かい感覚が手はおろか顔にも少し伝わる。

「グォアアアアッ！！！　キッ、貴様アァァァァッ！！！」

「ぎ、ぅあっ！！？」

更に深く突き刺さるように突き刺したクナイの柄を蹴り、地面に飛び降りようとしたアタシのお腹に、まるで銃弾が貫通したかのような衝撃と激痛が走り、アタシはそのまま地面に受身を取る事もなく地面に落ちた。

「ユフィっ！！」

シドの声が聞こえる。だけどその声に応えようにも、身体が言う

事を効かない。心臓の鼓動と共に、何か熱いモノがお腹から流れ出してる。力も一緒に、身体から抜けてく。

あぁ……痛ったいなもぉー……。マテリアハンター・ユフィ伝、『九死に一生すぺしゃる』って感じ……。

「我ガ左目ヲ奪ッタ代償……。ソノ身ニ受ケヨ！」

……何か、マジでヤバイ感じ。

邪悪な気配……力が、徐々に一箇所に集まっていくのを感じる。それは多分、アタシを一瞬で消し飛ばす威力が、ある。

こんなところでホントに終わんの？

終われない。

まだまだ、終われないのに……っ！！

——ちっくしょおぉぉぉぉっ！！！

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｎｅｘｔ…

第七話　「リミットブレイク」

間に合わねぇ――。

俺は、そう思った。

本気で、もう駄目だと思った。

徐々に奴の大口に集まりつつある邪悪な高エネルギー体は、目に見えずともその波動はひしひしと俺の肌に伝わり、まるで全身を獣に舐め回されているかのように心地悪い。気をしっかり持ってねぇと眩暈さえ起こさせる瘴気が、全身の毛穴を開かせ、鳥肌を立たせる。

バカでかいエネルギーの波動。これと似たような波動を、俺はいつか体験している。

――……そうだ、召喚マテリア“ババハムート改”だ。あの“ギガフレア”と同じ感じなんだ、この感じは。

だとしたら――まさか破壊力まで同じだとしたら――……。

「ユフィっ、てめぇいつまでもコケてねぇでさっさと立ちやがれえええっ！！」

叫んでみるが、ユフィの反応はない。あのまるで炎を圧縮して弾丸として弾き出したようなレーザー光線を腹に受けて、地面に突っ

伏したまんまだ。

「くっそぉっ！」

悪態を吐きながら、俺はユフィの元へ走った。途中、何度も何度も瓦礫に足を奪われ派手に転んでも、俺は走った。

マテリアがあれば、こんなピンチなんてお茶の子さいさいで、ただ『アレイズ』か『ケアルガ』を唱えるだけで、俺は一歩も移動なんてしなくても良かったし、魔法を掛けてさえやれば後はてめぇで避けやがれ…ってな感じで、それだけで事足りる。……マテリアさえあれば、の話だ。

そのマテリアがない。取りに行く時間も暇もない。治療薬もない。つまり、今の俺に、ユフィを助ける事が出来る可能性はかなり低いってこった。“アレ”が放たれるのは多分、時間の問題だろうしな。

ケッ、俺様らしくねぇ！　とにかく気合と根性で――。

その時だった。

――ズンッ！

「うおっ！？」

俺の目の前に上から突如、何か細長い物体が落ちてきて、地面に突き刺さったのは。

突然の出来事に俺の足はストップしちまったが、どうやら俺がアイツを助ける必要はなくなっちまったようだ。チッ、てっきり逃げちまったと思っていたが……戻ってくるたぁなかなか男じゃねぇか！

「――シドさん、ユフィさんの事はボクに任せて下さ――……任せとき！！」

真っ白い身体のデブモーグリとそれに乗ったネコ――の人形が上から落ちてきて、丁度ユフィの傍へと降り立った。途端、ユフィの身体を淡い緑色の光が包み込み、傷を急激な速度で消し去っていく。

俺は目の前に落ちてきた細長い物体――俺の相棒、ビーナスゴスペルを手に取り、攻撃に転じるため空高く目掛けて地面を蹴る。ちゃぁんとマテリアも装着されてやがるから……ってか、あの戦いのままだな。何のマテリアが装着されているのか、よおっく分かるぜ！

「ケットぉっ！　化けモン野郎は今ヤベぇモン放とうとしてやがる！　気ぃ付けろ！！」

上空へ上がりながら、俺は下を見て叫んだ。

「だいじょーぶでっせっ！　奴は今、なんか知らんけどボーっとしとりますわ！！」

「バッキャローっ！！　オメェは人形だから何にも感じないんだろうが、でっけぇエネルギーが――」

途端、奴の口に集まった高エネルギー体が、青白いような色を得

た。

ケット・シーはそれを確認したんだろうか。それは分からんが、少なくともアイツはツインタニアの方を向いちゃあいなかった。上空からでも、それははっきりと分かった。

「避けろおおおぉぉぉぉぉぉっ！！！」

放たれた高エネルギー体。それは、コンマ何秒という速さで、アイツらの所へ到達し、そして――。

寸前、俺は、ユフィが起き上がったのは確認した。避けたのか、食らったのか、こっからじゃ分からねぇ。

だが、ケット・シーは――――……。

……。

……蒸発、した。

闇の中の一筋の光

第七話　「リミットブレイク」

アタシの目に焼き付いてる、ケット・シーの最期。

私が起き上がった瞬間に見た光景――迫り来る青白い高エネルギー体。

動けなかった、避けられなかったアタシの身体を、ケットが突き飛ばした。そして次の瞬間、アタシの目の前をエネルギー体が通り過ぎ、ケットはそれに呑まれ――……。

……消えた。

……。

高エネルギー体が通り過ぎ去った跡。焼け焦げたような臭いと、抉れたような地面。

アタシは暫く、呆然としたまま動く事が出来なかった。

仲間が消える。

二度目の経験。

それも、二回共、アタシの目の前での出来事。

アタシハタダ、見テル事シカ出来ナカッタノ？

「――……のヤロオォォォッ！！！」

耳に届いた声。その声のした方を見てみると、上から落ちてきたシドが槍――ビーナスゴスペルをツインタニアの頭に突き刺した所だった。すぐにビーナスゴスペルを抜き取り、頭を蹴って跳躍すると同時にツインタニアの顔を中心に大きな火の玉が幾つか生まれ、爆発する。封印されし魔法、『フレア』だ。

「キ、貴様ァッ！！」

「今のはケットの分！！　こっから先はこの俺様の本気を見せてやらぁっ！！」

怒り、だ。

込み上げる怒り。それを放った化け物と、何も出来なかったアタシ自身に対する怒り。

拳を思いっきり握る。その拳が震える。意識せずとも、怒りがそうさせる。

アタシはゆっくりと立ち上がり、そして足に何か硬い物が当たって、それに初めて気付いた。

地面に転がっていたのはアタシのお得意の武器、大手裏剣――不倶戴天。マテリアも装着されてるって事は、あの時のまんま。

きっとケットが持ってきてくれたんだ。

アタシはそれを拾い上げ、手に持ち、そして。

「シド！！」

「……生きてやがったか！　なら、さっさとコイツを片付けるぞ！！」

「うん！　アタシらが怒ったら怖いんだって事、見せてやるっ！！」

ツインタニアに向かって駆けながら、アタシは不倶戴天に装着された一つの、黄色いマテリアを見た。そのマテリアの中の知識が頭の中に流れ込んでくる。そしてその中にイメージした一つの魔法の名を見つけ、発動させる。

「『マイティガード』！」

アタシとシドの身体を光が包み込み、それと同時に全身に力が漲る。目に映る全ての光景がスローモーションのように遅くなり、アタシとシドだけ、その空間の中で素早く移動する事が出来る――そんな錯覚の中、アタシはまた魔法を唱える。

「シド、跳んで！！」

「お、おう！？」

シドが地面を蹴るより早く、魔法が発動される。それはツインタニアの真下に放ったんだけど、さすがにツインタニアの身体が大き

く、重いから、まだその効果は確認出来ない。

シドが地面を蹴り、魔法の発動が少し見えてきた直後、アタシの目の前に映ったのはアタシを貫かんとする、何か炎の弾丸みたいなモノ。さっきはコレを食らったんだなぁと思いながら、アタシはひらり、ってな感じで身をよじって避けた。スローモーションみたいに本当にゆっくりだから、簡単に避けられる。まぁ正確に言うと周りがスローじゃなくて、アタシらが速くなっただけだけどね。

「……いける！」

ツインタニアの身体が、浮いた。その下にあるのはまだ小さな小さな竜巻。それが徐々に大きくなり、やがてツインタニア程の大きさになる。竜巻は威力を増し、あの巨体を軽々と持ち上げ、天へと持ち上げていく。

「小癪ナ……ッ！！」

「ハッ！　ここからが“小癪な真似”なんだけどなぁ！　……シドっ！！」

「おうよ！　食らいやがれぇぇぇぇっ！！」

巨体がある程度天に舞い上がったところで、『トルネド』が消滅する。巨体はただ重力に引き摺られて落ちるんだけど、更に上空へ上がっていたシドが落ちてきて、自由落下に強烈な拍車を掛けた。そしてアタシは――……ツインタニアが落ちてくるであろう場所に、また魔法を唱える。

氷。硬く、鋭く尖った、巨大な氷の塊。それをイメージし、両の手に纏った魔力を爆発させる。

勢いよく落ちてきたツインタニアの身体を、聳え立つ氷で出来た剣山が肉を抉る嫌な音と共に貫いた。紫色の鮮血が傷口から、そして大きな口からも飛び散り、小雨のようにその周囲の地面に降り注ぐ。氷を伝う血液は少しずつ地面に血の池を造りつつあった。

「ガアアアァァッ！！　小癪ナ真似ヲオォォォォッ！！！！」
「そう言ったじゃん！　シド、次で決めるよ！！」
「言ッテクレル！！　コレデ……全テ消シ去ッテヤロウ。……ココマデダ！！」

途端、ツインタニアを貫いていた氷、そしてその周りの氷が全て音を立てて砕け散った。紫色の鮮血を噴水のように吹き出した傷口が、一秒単位で塞がってきている。……マジ？　『リジェネ』を唱えてるワケじゃあるまいし、その再生能力は反則じゃない？

でも、まぁ。

今のアタシは、そんな事くらいじゃ怯まないよ。

「……今後ハ外サナイ。……“テラフレア”！」

ツインタニアがまた大口を開く。先と同じように邪悪な気が集結し始め、高エネルギー体へと変化していく。さっきと違う点は一つ。その邪悪な気でさえ黒っぽいオーラを放ち、集結していく高エネルギー体はもう青白い光を放ってる。

瘴気が、まるで乗り物に酔ったみたいな気分の悪さを感じさせる。だけど今のアタシは船に乗ってる時みたいに、だらしなくする訳にはいかない。気をしっかり引き締めて、しゃきっとして、奴に立ち向かわなきゃ。アタシの為に死んだケット・シーの為にも！

「次で決める、だよなユフィ！」

いつの間にか傍にまで戻ってきていたシドが言う。

「うん、だから――……これで最期だ！！」

シドが“アレ”に合図を送る。そして、アタシは――。

×××

その大きなエネルギーは、遥か遠くを飛ぶ悪魔も感じとっていた。

悪魔は常に戦いの場を探していた。

戦いこそ自らの全てだと、それが宿命であり、運命であると、信じて疑わない。

一種の本能が、悪魔の行動を支配する。

今の悪魔の両の手に眠る、二つの影。

獣と、人間の子供。

それも、一種の本能がさせているのだろうか。

それは悪魔自身にも解す事は出来ず、また、獣と人間の子供も、それを解す事はない。

それを解せるモノはただ一つ。

悪魔の中に眠る、もう一つの心のみ。

悪魔は翼を一度大きく羽ばたかせ、速度を上げた。

そのエネルギーを感じ取った場所に向かって。

悪魔は飛ぶ。

戦いの場を求めて。

悪魔は飛び続ける。

己の存在意義を求めて。

×××

「俺様は煙草が好きでよぉっ！　特別にお前にもその味を味わわせてやるぜぃ！！」

合図を送って数秒、早くも上空から豪快な愛機のエンジン音が聞こえ始める。俺は胸のポケットから煙草を取り出し、口に銜えながらもう片方の手でズボンのポケットに入っていたライターを取り出し、火を点けた。煙草の煙を肺一杯に充満させて、一気に口から吐き出す。かーっ、うんめぇ！

「俺様の愛機を狙われちゃたまらんからな、煙幕代わりに食らえや！」

上着の内側のポケットから取り出した一本の赤い、筒状の物体――ダイナマイトの導線に、口に銜えた煙草の火に近づけ、そして導線からバチバチって乾いた音が聞こえ始めた瞬間、俺はそいつをツインタニアの顔目掛けて投げた。

上手い具合にダイナマイトがコツン、とツインタニアの顔に当たった瞬間、爆発する。爆風と爆煙がツインタニアを中心に生じ、気付けばユフィがそれを諸共せずに奴に向かって駆けていっていた。

「おい、ユフィ！？」

叫んでみるもユフィは俺の声をまるで聞く気もないらしく、その速度は変わる事はなかった。

――ったく何考えていやがる！　アタシ諸共奴を吹っ飛ばせ、っ

てか？　バカヤロ！！

「くそっ、早く発射しろぉ！！」

叫んだその瞬間、上空から爆発音が聞こえ、愛機――ハイウインドから多数のミサイルがツインタニアの、それも顔に向けて発射される。ユフィよりミサイルの方が速い。爆煙で見えなかったが、きっとユフィよりもミサイルの方が先だっただろ。何発も続けて炸裂音が轟き、爆発が空気を焼き、大地を焦がす。

これが俺の、“最高の技”だ！

だがミサイルが全て直撃しても、ツインタニアの反応はない。断末魔も、何も聞こえない。まだ煙のせいで視界が晴れてねぇから分からねぇが、まさかこれくらいの攻撃でもビクとも――？

突風が吹き、煙が晴れ、俺は思わずユフィがやっている事――いや、やろうとしている事に、唖然とした。

音もなく、口に銜えていた煙草が、地面に落ちる。

皮膚が焦げ、牙が砕けていた。だが、奴の眼光は衰えず、それは未だ殺気を以った鋭いモノだった。俺の攻撃は確かに効いている……ようだ。何とかそう見える。

しかし、口に集まっていた高エネルギー体は完全に消滅はしていなかった。確かに青白い光は消え、邪悪な気配は衰え、高エネルギー体は消滅したかのようにも見える。だが、それは決して消滅してはおらず、今のままでも少なくとも最初の一撃と同等くらいのモノが存在してる。身体に伝わる心地の悪い感覚が、それを証明してい

た。

気付いてやってるのか、それとも気付かないでやってるのか。

ユフィは、ツインタニアの折れた牙に乗り、両手を眼前に――つまり、奴の口へと構えていた。

アイツは、奴の口のほぼ中にいた。

「さすがのアンタでも、これだけ続け様に一箇所を集中攻撃されたら、痛いんじゃないの？」

「……コノママ噛ミ殺サレタイカ？」

「まさか！　アタシはただ、止めの一撃をお見舞いに来たのさ！！」

ツインタニアの口から、青白い光が輝き漏れる。それはユフィの攻撃なのか、ツインタニアの攻撃なのか、それとも両方の攻撃なのか。

少し離れた場所にいた俺には、分からなかった。

ただ言えるのは、ユフィは確実に攻撃――“アレ”を放った事。

「“森羅万象”！！」

ほら、な。

ったくあの馬鹿、わざわざ力比べなんざやりやがって！！

もし負けたら――。

いや、もし死んだら、殺してやるからな！

To Be Next…

第八話　「終結するチカラ」

「全く、ユフィさんは相変わらず無茶をなさいますね……」

飛空艇ハイウインドのブリッジで、今となってはもうガラクタとなってしまったケット・シーのリモートコントローラーを汗ばむ手に強く握ったまま、私はその光景を眺めていました。魔物の大口から漏れる、眩しいばかりに輝く光――……そういえば、こういう戦いを“生”で見るのは久しぶりですね。ミッドガルにウェポンが襲来した時以来でしょうか。いつもは人形のカメラ越しですから。

あの太ったモーグリの人形はもうアレで最後でしたっけ。猫の方はまだあったと思いますが……勿体ない事しましたね、やはりこのリモコンじゃ的確な操作は出来ませんでしたか。カメラに映った、人形達が最後に見た光景……あぁ、私自身に直撃するんじゃないかと思ったくらい、今思い出しても鳥肌が立つ、物凄い衝撃映像でしたよ。もしもデータが残っていたら、私の実況付きで皆さんにもお見せしますね。

「ど、どうしましょう！　これではミサイルも打てませんし……」

操縦桿を握る操縦士さん――名前は……すみません、忘れました――が慌てた様子で私の顔を見ます。冷や汗を掻き、顔を少し紅潮させ、興奮しているみたいです。

「……さぁ、どうしましょうね。あ、とりあえず前見て操縦して下さいね。危ないですから」

「はっ、すみません！　しかし、本当にどうしたら……」

「落ち着いて下さい、あなたが取り乱しても状況は変わりませんよ」

「わ、私……実はあのユフィちゃんの隠しファンなのです！　あぁ、もしあのユフィちゃんにもしもの事があったら……」

隠しファン？　それを言うなら隠れファンでしょう。うむ、冷静を欠いている証拠ですね。

「あったら……なんです？」

「あったら……」

「……」

「……」

「まあ、それはいいとして、今の私達に出来る事は特にありませんよ。ケット・シーも壊れてしまいましたしね」

お二方を助ける役は果たせましたからね、悔いはありません。ですがもう少しだけ、彼らを助けてあげたかったですね。せめて後方支援だけでも……。

猫の人形はまだある、と言いましたが、このリモートコントローラーで制御出来るように設定しなければなりませんし、その人形は崩壊した神羅ビルの中にありますので、探すのも骨が折れます。何より問題なのが、“ケット・シー”は猫とモーグリの人形が一対となって初めて戦力になるのですから、猫だけで果たして何が出来るのでしょう。

やはり、後方支援さえ出来ません。

「リーブさん？」

今度はしっかりと前を向いたままで、操縦士さんが言いました。

「何ですか？」
「リーブさんは今、凄く冷静ですよね……。尊敬してしまいます」
「何をおっしゃるんですか。私は今、凄く動揺してますよ？」
そう言って私は笑顔を作って見せます。
「そ、そうなんですか？　とてもそうには――」
「人には人の動揺の仕方、という物があるんですよ」
「はぁ……」
曖昧に頷くと、彼はもう何も言いませんでした。
今言った事は、半分は本当ですが、半分は嘘です。いえ、どちらかと言うと、私はあまり動揺も取り乱したりもしていません。勿論、無茶をするユフィさんが心配で、どうなってしまうんだろうという不安はあります。
ですが、私は信じているのです。
ユフィさんは絶対に、勝ちます。絶対に、負けません。
共に死線を潜り抜けた私が言うのですから、間違いありませんよ。
私達はただ、そう信じて待つのみです。
そういえば、ユフィさんはケット・シーが消滅して怒りが爆発したようですが……。

もしかして、ケット・シーがただの人形だという事、忘れてたりしません……よね？

闇の中の一筋の光
第八話　「集結するチカラ」

「うおおおおっ！！！」

アタシの中に宿る全ての力を爆発させる。

熱い。とんでもなく熱い。

まるで火炙りにでもされてるかのような灼熱地獄の中、アタシは超必殺“森羅万象”を放ち続けてる。少しでも気を抜いたら、ケットみたいに消滅してしまう。“森羅万象”の光の向こう側には、アタシを呑み込もうとする、“森羅万象”なんかよりもっと強力なエネルギー体が存在してるから。だからもっともっと集中して、アタシの全ての力を、この化け物野郎に――……っ！

エネルギーとエネルギーのぶつかり合い。チカラとチカラのぶつかり合い。

そのエネルギーが放つ青白い光のせいで、アタシの目には何も映らない。

そのエネルギーが放つ轟音のせいで、アタシの耳には何も聞こえない。

ただアタシは力尽きるまでやるつもりだった。ホントにホントの力比べ。こっちが先にへたるか、あっちが先にへたるか、ただそれだけの簡単で単純な勝負。

長く、長く感じる。

だけど実際には、この出来事もほんの数秒の出来事なんだろう。もしかしたら時計の秒針でさえ満足に動いていないかも知れない。

「くっ、そおぉぉぉっ！！」

“森羅万象”が“テラフレア”に押されてる。こっちの威力が低くなった訳でもない、あっちの威力が、さっきより少し増したんだ。こっちはもう限界ギリギリだってのに、あっちはまだまだイケるって事！？　あーっ！！　何か遊ばれてるのと出し惜しみされてたのとでムカつくなぁっ！！

負けるもんか。自分から突っ込んどいて負けるとかカッコ悪すぎなんだかんね！

「負けて、たまるもんかぁぁぁ！！！」

最後の力を振り絞る。ちょっとだけ“森羅万象”が押し返したのを確認出来た。

けど。

……アタシの意識は段々と……薄く……なって……き……。

ふっ、と力が抜けた。

アタシの掌に集まっていた気が消え、身体を包み込んでいた灼熱地獄も同時に消えた。その弾みでアタシは後方に倒れ、少しだけ重力に引かれて、やがて地面に落ちた。

仰向けに地面に倒れたアタシ。ずっと眩しい光を浴びていたせいで、視力はまだ回復しない。だけど、アタシとツインタニアの勝負に割って入ってきた者の正体は分かった。耳鳴りが酷いけど、あの音は聞こえたからだ。

……ちぇっ、アタシは結局、威力の相殺しか出来なかったワケか。

“アイツ”が翼を羽ばたかせる音と、“奴”の声。かろうじて耳に入ってきたその二つの音が、アタシに全てを教えてくれた。

“アイツ”がタイミング良く駆け付けてきた事と、“奴”がまだ生きてるって事。

「ユフィ、生きてるかっ！！」

シドの声だ。あーはいはい、生きてるよ。耳が痛いからそんなに大声出さないでよ。

ったく、おいしいとこ持っていっちゃってさ、アイツ。

目を覚ましたら、一発ガツンと……お見舞いして……。

「ユフィっ！？　死ぬな、目を覚ましやがれぇぇぇっ！！！」

……。

……Ｚｚｚ。

×××

混沌の名を持つ悪魔の翼が一閃される度に、魔物の鋼鉄のような皮膚や肉は裂け、骨が砕ける。

目には決して捉える事の出来ない斬撃に切れぬ物など皆無に等しく、それを浴びて立ち続けていられる者も皆無に等しい。

勿論、例外もある。例えば、その破壊力を上回る防御力を持った魔物。または、その破壊力を上回る再生能力を持った魔物。

その魔物は、後者の方だった。

何度斬撃を喰らっても倒れる事のない魔物に、悪魔は少なからず困惑していた。だが困惑しようがしまいが、悪魔のやる事に変わりはない。

目の前に敵がいる。だから倒す。だから殺す。

――否。滅するのみ。

魔物が嘲笑する。だが悪魔はその意味を解す事はない。

やがて悪魔が大きく翼を羽ばたかせ、空高く舞い上がった。その紅き瞳に映るは、既に標的の屍のみ。

それは、悪魔が勝利を確信しているという、証拠だった。

魔物が大口を開く。――この一撃で、鬱陶しい蝿を落とす為に。

悪魔が召喚する。――この一撃で、標的の魂を狩り獲る為に。

そして、咆哮が辺りを包み込んだ。

×××

聞き覚えのある翼の音が空からしたような気がして、ふと空を見上げた俺の目に映ったのは、一度見たら忘れる事の出来ない、紫色の悪魔の姿だった。実際には丁度逆光になっちまっててそいつの身体の色なんて判別出来やしねぇ。だけど俺には――いや、俺達には分かる。そいつは、“アイツ”だって事。

「“カオス”……ヴィンセント？」

隣を歩いているティファがぽつりと言う。“重い荷物”を担いでるが、さすがティファ、すぐにその重さにも慣れちまって今は悠々としている。……とりあえずバッツの野郎には、俺が運んでやったと言っておくか。

さすがに「女にお姫様抱っこで軽々と運ばれた」なんて言えねぇからな。

世の中にゃ知らない方がいいって事が多い――……けど、まぁ聞かれたら答えてやるか。……アイツのプライドやら何やらが崩れち

まうかも知れねぇが。

――なんて、ほのぼのやってる場合じゃあねぇな。

「感じてるよな？」

さっきからずっと気になってた疑問を今ようやく言葉にする。

「勿論、感じてるよ。禍々しい気配……瘴気……歩けば歩く程、その嫌な感じが強くなってる」

「で、そこにアイツが現れたとなりゃ、やっぱこりゃ只事じゃなさそうだ」

ったく次から次へと。せっかく落ち着いたと思ったのに、それもたった数日で終わりかよ。

「急ぐ？」

ティファがのんびりした口調で言う。どうやら俺と同じ気持ちらしい。

「急ぐっきゃねぇだろ」

俺とティファはほぼ同時に走り出した。

……俺の方が“荷物”は軽い筈なのに、同時に走り出した筈なのに、何でそう軽々と俺を引き離せるんだよ、ティファ。

×××

ようやく地上に降り立った私はもう屍となった魔物には目もくれず、倒れているユフィと彼女を介抱しているシドの元へとゆっくりと歩み寄り、両手に抱えた大きな二つの荷物を地面に降ろした。長時間持っていたせいか、少しだけ腕に疲労感がある。……どうでもいいが。

「……数日ぶりだ、シド」
「ケッ、おいしい所持って行きやがって、このキザ野郎が――って言いてぇとこだが、てめぇがいなけりゃユフィはもうこの世にバイバイしてただろーからな、一応礼は言っておくぜ」
「……必要ない。それで、この魔物は一体何だ？」
「待ちやがれ、先に俺様から質問させろ！」
「断る。先に答えろ」
「ケーッ！　強引で無愛想な所は相変わらずだな！」
「たった数日で人の性格が変わる訳もないだろう。……答えられないならそれでもいい、お前の答えなど容易に予測出来る」
「――だったら言ってみやがれ！」
「『知らん。突然出てきた』」
「……」

憤怒に燃えるような、それでいて少し呆れ顔のような、シドはそんな顔で私を見ていたが、やがて大きな溜息を吐いた。分かりやすい男だ。……しかし、やはりシドも知らない、か。知っている筈がないと初めから期待などしてはいなかったが。

改めて周りを見る。何かしらの残骸や瓦礫に覆われた円状の都市――“腐ったピザ”という名称が、皮肉にも今のミッドガルにある意味最も適しているように思える。大都市から廃墟へ、それはたった一瞬の出来事。『メテオ』の威力の凄まじさを表しているようだが、実際はこの星を破壊する程の威力だ。被害がただこれだけで済んでいると考えるべきなのだ。――……“彼女”のおかげで。

さて、と溜息に似た息を吐き、地面に転がる、両腕に抱えてきた“荷物”を改めて確認する。

「ナナキの野郎に……何だぁ、この小娘は？　まさかお前の――」

隠し子、とでも言いたいか？　シドがその先を言う前に、私が口を開く。

「知らん。ナナキの仲間のようだから一緒に助けてきた、それだけだ」

「助けた？　どーゆーこった、一から十まで全部説明しろぃ！！」

隣でシドが騒いでいるが、面倒だから無視する。

私が運んできた“荷物”。赤毛の獣――ナナキ。それに、見慣れない格好の黄色い髪の少女。まだ幼く、年は１０歳程に見える。どちらもまだ気絶しているらしく、私が地面に降ろしたまま、未だに微動さえしていない。無論、死んではいないが。

この少女からは何処か、不思議なモノを感じる。シドはガサツだから感じないだろう。

「ユフィは大丈夫か？」

そう言い、地面に仰向けになったままの彼女を見る。

「てめぇ俺様を散っ々無視しやがってその上――」

「……大丈夫そうだな」

「結局俺様は無視かっ！？」

このまま無視し続けるのも悪くはないが、さすがに五月蠅い。仕方ない、相手をしてやるか。

「喚くな。全部後で話してやる」

「後っていつだ？」

「もう少ししたら彼らが――いや、来たか」

こちらに近付いてくる二つの足音。一つは軽く、一つは重い足音。空の上から確認した場所からだとここまで時間は掛からない筈だが、恐らく彼女が彼の足に合わせたのだろう。

軽い足音の女――ティファが崩れた建物の陰から現れ、遅れて重い足音の男――バレットが現れる。彼女らの視線は一瞬、私達を捉え、すぐに私達の後ろの大きな物体に釘付けになった。……こんな巨大な魔物がいたら、さすがに誰もがそちらに目を奪われるだろうな。

「これって――」

「うおおっ、何だコイツぁ！？」

ティファの声をバレットが掻き消す。ティファが少しバレットを睨みつけ、私へと向き直る。

「……死んでるの？」

数日ぶりだと言うのに、挨拶はなしか。最も、期待などしてはいない。

「魂を死霊共に喰らわせた」

「……？　あぁ、“アレ”ね」

「“アレ”を放つたぁ、“カオス”でもこんな化け物相手じゃ相当キツかった訳だな！」

“アレ”――“カオス”の技、“サタンインパクト”の事だ。

……しかし、謎には謎が重なる物だ。いや、面倒が重なる、という表現の方が良いのだろうかと、ティファの両手に抱かれている一人の男を見ながら思った。あの少女のように見慣れない格好をした、見た事もない茶髪の男。

彼が何者かは、ハイウインドで一息吐きながらでも聞くとするか。

だが。

何か、だ。またこの星に何かが起ころうとしている。

勿論それは、良い出来事などではなく。

また、先の戦いのような、血生臭い出来事になるのだろう。

神出鬼没の魔物の出現、突然現れた二人の見知らぬ人間。

新たな争い、新たな謎。

私の中の“彼ら”が身を震わせて喜んでいる。

否。

喜んでいるのは私自身だ。

私はもう、戦いの中でしか生きられない、“魔物”なのかも知れない。

Ｔｏ　ｂｅ　ｎｅｘｔ…

第九話　「コスモキャニオンの悪夢：前編」

目が覚めた俺が一番初めに感じた事は、久しぶりに目を開いた時のような眩しさなんかじゃなく、誰かがバカ騒ぎしているような騒音でもなく、喉の乾きでもなく、どこからともなく漂ってくる甘い香りでもなかった。

……固い。

俺はそう感じながら目を覚ました。そう、固かった。一応枕のような“それ”は確かに俺の頭を丁度良い高さにしてくれていたのだが、まるでコンクリートで出来たブロックのように――はごつごつはしてなかったんだけど――固かった。この固さを表現すると、まるで筋肉質のマッチョマンの腹筋や大胸筋を枕にしているような感じ。う～ん、何だか生暖かいような、少しだけ冷たいような……って、一体何なんだこりゃ？

俺はその固い妙な感覚に戸惑いながらも、身体を起こすのは少し億劫だったから、目を閉じたままその状態で、聞こえてくる話し声に耳を傾けた。声の大きさからして、結構近いところで話しているらしい。聞いた事のある男の声に、聞いた事のない男の声に、聞いた事のない女の声。

「訳分かんねぇ事ばっか言ってやがんじゃねぇっ！！」
「……いい加減、同じ事を話すのは飽きたのだが……これで最後だ。コスモキャニオンが、消えた」
「それが訳分かんねぇって言ってんだよ！」
「消えた……とは不思議な言い方ですよね。どういう事かちゃんと話して頂けませんか？」

「私にも良く分からん。意識が侵食されていく中で見た光景だからな。……ただ、“消えた”と言うよりは“呑まれた”という表現の方が正しいのかも知れん」
「益々訳が分かんねぇ！　ンだよ、街や村を一呑みにしちまうよーな化けモンが現れやがったのか！？」
「……黒い、玉だ」
「黒い玉？　どういう事です？」
「巨大なブラックホールだ。……これ以上の事は私にも分からん。聞けるものなら私の内に潜む悪魔に問いかけてみるのだな」
「ケーッ、無理な事言いやがって！　まぁいい、あと一時間もすりゃコスモキャニオンに着く。そこで全部分かるって訳だ」
「そーゆー事だね！　で、こっちの黄色い髪の女の子とそっちの茶髪の男の人、誰さ？」

茶髪の男の人……って、俺？　黄色い髪の女の子って……？

「そっちの女の子の方は知らねぇが、男の方の名前はバッツって言うらしい。たまに妙な事口走ったり突然剣を何もない空間から取り出して振り回したり、妙な男だが腕の立つ男だって事は間違いねぇな」
「見た事ないような格好してるけど、何処の人？」
「さぁな。こんにゃろ、記憶喪失だとか言って答えるのを避けてやがったからなぁ。まぁ俺様がその嘘を見抜いてやったから、目ぇ覚めたらとっちめてやるぜ」
「悪い人じゃないんだったらとっちめるまでもないんじゃないの？」
「だがコイツはあの時、マリンを消しやがったジジイと知り合いだったようでよ。もし何かしらの関係があるんなら、やっぱとっちめねぇと」
「その“とっちめる”って言葉、何か嫌な響きだねぇ」
「今の“とっちめる”って意味は、別に拷問して吐かせる、なんて

意味じゃないわよ、ユフィ」

今度は頭の上から声がした。さっきとは別の女の声だ。

「じゃ、どゆ意味？」

「ご想像にお任せ」

「えええぇぇっ！！　バレット、そーゆー趣味あったんだー！！

うーわ、げろげろ。余計に気分悪くなってきたじゃん！！」

「おいおいおいおい待て待て待て待て！！　一体どんな想像しやがったんだ！！？」

「……きょーみあるなぁ、なぁヴィンセント？」

「興味ない」

「私も……別に」

「堅物のリーブにゃ聞いてねぇよぉ！」

「……なら私にも振るな」

「おめーはそういうの好きだろ？」

「……」

「……悪ぃ悪ぃ、おめーをからかったこのシド様が悪かった。

だからその銃しまえや」

とんでもなく騒がしい。何かヤバイような予感がするし、ここは一先ず起きるとしよう……と、ふあぁぁと欠伸してゆっくりと挙げたその手に。

むにっ。

何か、柔らかい感触があった。それが何かを確認しようと目を開いた刹那。

「どこ触ってんのよおぉぉぉぉっ！！！」

――ゴスッ！

「うぎえっ！？」

……ヤバイ予感、的中。

俺が最後に見たのは、物凄い速さで眼前に迫り来る、“グーパン”だった。

闇の中の一筋の光

第九話　「コスモキャニオンの悪夢：前編」

「おいしい！」

それを口にぱくりと入れた瞬間に思わず大声をあげてしまい、隣

で同じようにお料理を食べているナナキ君がびくっとして私を見る。あちゃー、恥ずかしい。私は自分の耳が赤くなる音を聞きながら、お料理を口の中に入れたまま照れたように笑った。ナナキ君もつられて笑う。

……こういうの、何か、久しぶりで、嬉しい。

「ありがとう、そう伝えておくよ」

もぐもぐ、ごっくん。ふぅ。

「ごめんね、大きな声出しちゃって。びっくりしたでしょ？」

「まあね。オイラも大好きなんだ、この料理。オイラはずっと小さな頃から毎日のように食べてるんだけど、全然飽きのこない味なんだよね。この地方に古くから伝わる伝統料理なんだ」

「そうなんだ。私は――……」

自分の食生活を答えようと言葉が喉のところまで出掛かったんだけど、私はそれをぐっと呑み込んだ。どんなものを食べていたのか、どんなところで食べていたのか――それが嫌味のようにナナキ君に聞こえてしまいそうで、それが怖かったから。今のこの瞬間が壊れてしまいそうで、怖かった、から。

私は、実は、とあるお城の、王女なの。

……そう言ったら、ナナキ君はどんな顔をするんだろう。冗談でしょ、と笑ってくれるのかな。だけど私は、きっと一生、そんな事はナナキ君には言わないと思う。まだ出会って、話し始めて一時間も経ってないんだろうけど、そんな短い時間で、私はナナキ君の事をとっても好きになってしまったから。まるでミドと話しているか

のように、言葉なんて選ぶ事もなく、簡単にお話が出来る。……それが、本当に嬉しかった。

そこまで考えて、私はふと、思い出した。自分に課せられた宿命を。

ミド……そうだ、ミドは――……。

「……私は……」

こんなところでのうのうとしていていいの？

のうのうとしている暇なんて、あるの？

戦わなきゃ、いけないんじゃないの？

戦わ、なきゃ――……。

「――うしたの？」

手ががたがたと震えている。目に見えて、はっきりと。

……戦い。それを考えただけで、こんなにも、怖い。こんな気持ち、初めて。

底のない沼に足を踏み入れてしまったかのように、闇へ闇へと沈んでいく身体と心。空に輝く眩しい光に手を伸ばしても、決してそれに届く事はない。もがけばもがくほど沈んでいく身体。堕ちていく、心。助けてくれる王子様も、手を差し伸べてくれる希望の光も、支えてくれる優しい声も、みんなみんな、いなくなってしまった。

最後に、捕まるところのない天へと手を伸ばす。それはきっと、助かりたいと願う気持ちなんかじゃなく、それはきっと――……きっと……自分の足で前に進みたいと願う、私の、本当の気持ち。

起き上がらなきゃ、立ち上がらなきゃ、歩き出さなきゃ……いけないんだ。底のない沼にどれだけ沈もうとも、どれだけ堕ちようとも、差し伸べてくれる手がなくても――。

分かってる、分かってるんだけど。

分かってるん、だけど……。

「――ねぇ、クルル！」

「えっ……」

気が付くと、ナナキ君の顔が真ん前にあった。心配そうな顔をして、私の目をじっと見てる。

「大丈夫？」

「……ナナキ、君」

「怖い夢でも、思い出したの？」

「ううん、そんなんじゃ、ない、よ？　きっと」

「オイラじゃ頼りないかも知れないけどさ、こうやって知り合ったのも何かの縁だし、困った事があるんなら相談にのるよ」

どうしてこんなに優しいんだろう？　皆も、そうだった。バッツもレナもファリスも……そしておじいちゃんも、私に優しかった。優しくて、温かかった。泣きたいくらいに、温かかった。

ぽろ、ぽろり。

何でだろう。何で涙が溢れてくるんだろう。

ぽた、ぽたり。

涙が零れて、私の手に弾けた。その弾けた涙の欠片が、ナナキ君の肩の刺青に丁度当たって、消えた。

「ちょ、ちょっと……」

「ねぇ、ナナキ君」

私は涙を拭おうともせずに、真っ直ぐにナナキ君の瞳を見つめた。その瞳の中に、ある決意を固めた私の姿が反射して見えた――ような気がした。

「助けて、くれる？」

×××

「助けて、くれる？」

クルルはオイラの目を見つめながらそう言った。

「力になるよ、必ず。オイラはクルルの味方で、もう友達なんだから」

オイラがそう答えると、クルルの目からまた一つ、大粒の涙が零れた。

……よっぽど辛い事があったのかな。それとも、この状況がよっぽど辛いのかな。オイラには今のクルルは、親と逸れて一人ぼっちになってしまった子供のように見えた。……いや、実際そうなのかも知れない。こんな年端もいかない少女が、たった一人で不安じゃない筈がない。多分だけど、この子には親……もしくは親に代わるような——例えば大切な仲間がずっと傍にいて、今は逸れてしまったんだろう。そう……多分だ。これはただのオイラの憶測に過ぎない。

でも、もし、そうだとしたら……いや、そうじゃなくても。

オイラがしっかり、クルルの力になってあげなきゃならない。

「ほらほら泣かないで、冷めない内に食べちゃおう。残すとうるさいんだ、あの人は。食堂のおばちゃん、て感じだね」

クルルがあははと、少し無理に笑った。

食堂のおばちゃん、というのはオイラの頭のどこかしらにあるイメージでつい口に出しちゃったけど、実際どんなおばちゃんなのか、そもそも食堂がどんなところかもオイラは知らない。まぁ多分、食堂はご飯を食べるところ、おばちゃんはきっとそこで働く人で自分の作った物が残されるのが嫌いなんだろう。そう、多分。

多分、多分、多分。

……オイラって憶測や推測が好きだなぁ。

料理を全部平らげて、食器を片付けた後、クルルはソファに腰掛け、オイラはベッドの上に猫のように丸くなった。……食事を済ませた後は、これが落ち着くんだよね。う～ん、至福。至福だよ～……。眠くなったりなんかして……。

うとうととしかけたその途端、脳裏に強面のバレットが目に浮かび、オイラは慌てて飛び起きた。その目は怒りに満ちていて、何が言いたいのか、すぐに分かった。

『てめぇ、俺達が必死こいてミッドガルの修復作業やってんのに一人だけ至福に浸ってんじゃねぇーっ！！』

うう、ゴメンよバレット。コスモキャニオンに戻ったのはじっちゃんがいなくなっちゃったから残された皆が心配になったからで、別にサボりたかった訳じゃないんだよぅ。それにほら、オイラ人間

みたいな二足歩行の生物じゃないし、きっとミッドガルに残っても大した事は出来なかったと思うんだ。お腹一杯になってついつい……だから許してくれよー。

ふと気付くと、クルルがくすくすと笑っていた。

「何、一人でぶつぶつ喋ってるの？」

どうやら知らぬ間に全部口に出しちゃってたみたい。あちゃー。

「べ、別に何でもないよ」
「そう？　何か必死に弁解してたみたいだけど？」
「聞こえてたんだ……」
「ぶつぶつ、にしては声が大きかったからね」
「聞かなかった事にしてよ、ね？」
「仕方ないなぁ」

……いつの間にやらクルルの表情は笑顔になっていた。さっきまでは何処かぎこちなさがあったんだけど……とにかく、オイラは少しホッとした。何より、あの子のちゃんとした笑顔が見れて嬉しかった。

オイラはもう一度ベッドの上で丸くなり、尻尾を揺らした。

「……オイラ、どうすればいい？」
「え？」
「力になる、って言ったけど、正直何をすればいいのか分からないんだ、自分では」
「そうだね……私にも、どう力になってもらったらいいのか、分からないの」

そう言って、クルルは少し困った表情になった。

「私……記憶喪失とかそんなんじゃなくて、今まで私が見た事とか、全部鮮明に覚えてる」

「うん」

「何て言ったらいいのかな……聞いても信じてもらえないかも知れないけど、ここは、私の住んでた世界とは違う世界みたいなの」

世界が、違う？

「それってつまり、オイラ達から言わせてもらうと――」

「私は異世界から来た、事になるね。私からしたら、異世界に来たってところかな」

「……う～ん、確かにわかには信じられないなぁ。あ、ゴメンね、別にクルルが嘘を言ってるとは思わないんだけど、その……何て言うか……」

「この世界の人も魔法使えるみたいだから、それは証拠にはならないかぁ……」

「あぁそうそう、それそれ！　『ブリザド』の時から気になってたんだけどさ」

「何？」

「クルルは、どこにマテリアを装備してるの？」

ずっと気になっていた事。クルルの装備……ってか、クルルは特に武器やバングルとか装備してないみたいだ。魔法は、身に付けている装備にマテリアを装着させる事によって、そのマテリアの知識が装備を通じて装備者に伝わって、初めて使えるんだ。だからマテリア無しで魔法が使える筈が……。

「……まてりあ？　って、何？」
「え？　だって君――」

ぽん、という音とともに、クルルの天井に向けた掌の上に炎が生じた。……凄く魔力を抑えているけどそれは間違いなく、『ファイア』の魔法だった。

「――魔法は、魔法屋さんから魔法書を買って、それを読んで理解する事によって使えるようになるの……私の世界では」
「つまり……お店で買えるの？　魔法が」
「そういう事になるね」
「……実はマテリアを使って魔法を唱えてる、なんて事ない？」
「だからその、まてりあ、って何？」
「……」

マテリア無しで魔法が使える？　だとしたら……便利だなぁ。

多分、このマテリアと魔法の話をこれ以上続けても平行線だ。まだやっぱり……少しだけ信じられない部分があるんだけど、クルルは本当に別の世界から来たみたい。いや……うん、信じよう。何処にマテリアを装備してるんだーってクルルを裸にするのも、趣味じゃないし。

「……マテリア無しで魔法が使えるのは、十分な証拠だね」
「そのまてりあって、クリスタルみたいなもの？」
「そのくりすたるって言葉、逆にオイラは知らないなぁ。マテリアは仲間に預かってもらってるから、今ここにはないんだ。でも、赤とか黄とか緑とか、色々な色の丸い宝石みたいなものだよ」
「そうなんだ、やっぱり私、そんなの知らないや」
「う～ん……君が異世界から来たのは信じるとして……何でこの世

界に？」
「私にも良く分からないんだけど――……っ！！」
「え、何？」

クルルの身体が突然、『ストップ』でも掛けられたかのように硬直し、やがてがたがたと震えだした。

「ね、ねぇ、大丈夫？」
「何で……何で……“奴”が……っ！？」
「クルル！」
「この感じ……間違いない、けど……どうして、どうしてこんなところに……」

様子が、明らかに変だ。何を言っているのか分からないけど、とりあえず落ち着かせ――ようと近付いた瞬間、クルルは突然立ち上がり、下へ続く梯子の方へ走り出した。

「――っ！！」

言葉にならない言葉を発しながら降りていくクルルを、一瞬遅れてオイラは追い掛けた。

地獄の、始まりだった。

To be next…

第九話　「コスモキャニオンの悪夢：前編」（後書き）

どうも、黒鬼風斗です。
お読み頂きありがとうございます。
「闇の中の一筋の光」――5と7のコラボレーションという事で、色々な設定を取り混ぜながら書いていたのですが、支離滅裂としている箇所があるのはお許し下さい。

実は、この第九話で書き溜めしておいた分が最後になります。
短期間で一気にここまで更新していましたが、第十話以降は更新が不定期になります。
仕事の関係や他の小説の関係もありますので。。
しかしながら！　お気に入り小説に登録して下さっている方もいらっしゃいますので、気合を入れて出来るだけ早く更新して行けるよう善処したいと思います！

これからも宜しくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8761m/

闇の中の一筋の光　from FINAL FANTASY

2011年10月7日15時19分発行